View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Saga University Institutional Repository

Vol. 19, No. 1 (2014) (1)〜(39)

杜甫の詩と生活（五）
――「現代訓読文」で漢詩を読む（漢文教育の一探求として）

DUFU (712-770)'S POETRY AND HIS LIFE (5)

古川末喜
Sueki FURUKAWA

『要旨』

本稿は、本誌前号の『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第十七集第二号（二〇一三年一月）に掲載した「杜甫の詩と生活（四）――「現代訓読文」で漢詩を読む（漢文教育の一探求として）」の続編である。

依拠したテキストや訳注本、また体裁等は前稿に同じである。毎章の中心には、詩の原文とその伝統的な訓読を示し、次に段落をかえて、本稿で新しく試みる現代訓読文を、その後には、注解も含めた解説的な口語訳をおいている。

詩の前には、その詩が書かれたいきさつや、その時期の伝記的状況などを主に記している。

詩の後には、詩の題材やテーマ、表現の特色などについて、私が感じたものを自由に書きつらねている。その部分は、わたしはそのときこの詩をこう読んだ、こう感じたという個人的な報告に過ぎず、この詩はこう読んだがよいなどというものではない。

一　老体を　暖めんには　美女を要す

［2042_獨坐二首］其一

大暦二年、杜甫は米の収穫のため夔州（きしゅう）の瀼西宅（じょうせい）から、さらに瀼水（じょうすい）をさかのぼった東屯（とうとん）にしばらく居を移していた。その間、瀼西宅は娘婿たちに住まわせていた。ただ東屯に移り住んでいた時期も、瀼西宅を経由して、白帝城下の夔州の町中に、泊まりがけで出かけていくことがあった。年が明けると、いよいよ夔州を出発することになる。町には種々の所要があったのであろう。

次の詩は、そのころひとり夔州の町に宿りながら、詫び住まいの思いを歌ったものと思われる。杜甫五十六歳、晩秋のころである。

獨坐　二首　其一

竟日雨冥冥、
雙崖洗更青。
水花寒落岸、
山鳥暮過庭。
暖老思燕玉、
充饑憶楚萍。
胡笳在樓上、
哀怨不堪聽。

独坐　二首、其の一

竟日　雨　冥冥たり
双崖　洗われて更に青し
水花　寒くして岸に落ち
山鳥　暮れに庭に過ぐ
老を暖むるに　燕玉を思い
飢えを充たすに　楚萍を憶う
胡笳　楼上に在り
哀怨　聴くに堪えず

独り　こしをおろして坐りおり　二首、其の一

ゆうぐれどき　日を竟うるまで雨ふって　冥冥と　うすけぶり
おおかわに　むかいあう　双つの崖　あめに洗われ　更に青し
水のほとりに　さく花は　あきふかく　寒くして　岸べに　ちり落ち
山にすむ鳥　暮れがたに　ねぐらもとめて　わが庭に　おとずれ過ぎる
老いたる　からだ　暖めんとて　燕のくにの　玉のかんばせ　思いうかべ
はらの飢えを　充たさんとて　楚のくにの　萍のたね　憶いおこす
胡よりつたわる笳の　楼の上に在って　きこえくる
哀しくも　怨めしき　そのねいろ　むねふたがれて　聴くに堪えず

「ひとり坐って物思いにふける」二首、その一

一日中、雨が降りつづき、この峡谷の町は茫茫とうすけぶっている。長江を左右から、せばめるように向かいあう険しい崖は、雨に洗われ、さらに青い色を呈している。

水際に咲く花が、寒い季節を迎えて岸辺に散り落ちている。日暮れになると、山鳥がねぐらを求め、わが家の庭に訪れくる。

この老体を暖めたいとおもうては、燕の国に多いといわれる美女のことを思い浮かべる。また、腹のひもじさを満たしたいとおもうては、楚の国の川に生える浮き草の、あの縁起のいい伝説の赤い実を思い起こす。

高楼から、もとは西北の異民族の楽器だったという葦笛の音が、聞こえてくる。その怨むような、哀切きわまりない音色を聴いていると、胸がつぶれそうになり、もうこれ以上聴くことができなくなる。

＊　＊

はじめの二句は、濛々として雨が終日降り続き、その雨で、長江または瀼水の、川の両岸にせまる崖が、洗い清められいっそう青くなったと詠じる。季節は秋の終わりごろと思われるが、夔州は照葉樹林帯なので、崖の植生は、落葉樹は少なく、この時期でも青に見えるのだろう。どことなくわびしい景色である。

四句め、山の鳥がねぐらを求めて杜甫の庭を訪れている。「鳥」、「暮」と来れば、暮れ方に鳥が巣に帰る連想から、帰隠、隠遁を示唆することが多い。しかし普通は、鳥が山の巣に帰っていくのを見て、他郷で官に就いている作者が、本来帰るべき故郷に自分も早く帰っていかなくては、と連想するパターンである。しかしこの詩では、そんな山鳥が日暮れに、自分の庭にやって来ている。あるいは誰も訪れず鳥しか来ていない。というのは、鳥が帰り行くような隠遁地に、自分がすでに住んでいるということになる。つまり杜甫の気持ちとしては、自分はすでに隠遁地のような、わびしいところに住んでいるのだということを言いたいのである。

ところが五句めに来て、杜甫の想像する具体的なものが描き出されるや、わびしい状況は一変する。一瞬我が目を疑うようなことが書いてある。ここは聯の構成で言うと、起承転結の転の部分だから、そういう突然の変化も確かにありうる。

「老を暖む」とは、老体を暖める意味で、儒家経典の『礼記』内則編の、次のような記述を踏まえていよう。

五十始衰、　おとこは五十にして　始めて衰えはじむ
六十非肉不飽、　六十となれば　肉に非ざれば　あじは飽きたらず
七十非帛不煖、　七十となれば　ころもは帛を　みにつくに非ざれば　煖まらず
八十非人不煖。　八十となれば　人のぬくみを　かりるに非ざれば　からだ　煖まらず

最後の「人に非ざれば暖まらず」は、やや抽象的だが、漢の班固の『白虎通義』巻九十嫁娶編が引用する『礼記』になると、もう少し具体的に書いてあり、何のことかはっきりする。今本の『礼記』にはない文章である。

禮内則曰、妾雖老、　礼（記）の内則に曰く　妾は老ゆると雖も
未滿五十、　未だ　とし五十に満たざれば
必預五日之御、　必ず五日ごと　ともねして　あるじのところに　御ることに　預かる
滿五十不御。　とし五十に満てば　ともねには　御らず

俱為助衰也。
至七十、大衰、
食非肉、不飽。
寢非人、不暖。
故七十、復開房也。

俱に　ふたりとも　衰うるを助くるを　為せばなり
おとこ　とし七十に至れば　大いに衰え
食いものは　肉に非ざれば　あじに飽きたりず
よる　寝るは　人のぬくみに非ざれば　暖まらず
故に　とし七十となれば　復た　しめきりのある房を　あらたにもうけ　開くなり

これら儒家の文献に書いてあることは、七十、八十の老いた身体になれば、共寝して女性の生身のぬくみを借りるのでなければ、自分で老体を暖めることはできないということである。

それでは杜甫は、どのような人のぬくもりを借りるかというと、それは「燕玉」だという。「燕玉」とは、燕の国の生まれの、玉のように美しい顔の女性の意で、昔から楽府に「燕趙の美女二千人」などと歌われているように、美女である。

要するに杜甫は、五句めで、老人のこの冷え切った身体を暖めるには、自力では無理で、若い女性の添い寝が必要であり、となれば美女を輩出するという燕国の、美しい女性の顔を思い浮かべる、と詠じているのである。杜甫がこんなことを言いだすなんて……。

男女の交わりで不老長生のエネルギーを得るという発想は、根本では『易経』の陰陽思想とも関係があり、唐代には国教として隆盛を誇っていた道教の、房中術の一つでもある。もっと言えばインドの古代思想ともつながり、東洋的発想の一つであろう。そして杜甫は若いときから、同時代の李白や岑参等と同じように、道教にも強い関心を持っていた。道教の聖地で修道し煉丹することへの憧憬は、晩年にいたるまで、詩の中で繰り返し表明されている。儒教にしろ、道教にしろ、老体を暖めるには婦女の助けが必要という観念は、当時としては普通のことであったろう。

ところでこの五句めは、六句めとの対で書かれている。Aということではαというものがあり、Bということではβというものがある、という図式のなかで、それぞれに一種のブランドものを列挙していくやり方である。律詩でよく使われる句法だが、もの知りの杜甫は、とくにこういう時、名高いブランド品を次々と挙げていく。だからここは、飢えを満たすということでは、あの楚の萍の実が挙げられるし、老体を暖めるということでは、あの燕国の玉顔の美女があると、それぞれ有名どころの典故を列挙しているに過ぎない、という側面もある。しかも老体を暖めるといっても、儒教の教えから外れているわけではない。

ただ問題は、それを、詩に書くかどうかである。しかも他人の事柄や一般的な知識としてではなく、ある日ある時の、自分の差し迫った問題として、それが言い過ぎなら、自分が実際に思ったこととして、詩の中に書き込んでいるのである。心ひそかに思うことと、それに言葉を与えて外在化し、誰にでも見える詩の形にすることとは、決定的に違う。たとえば酒の席で、好んでそういうことを話題にするような人も、おそらく詩の題材に上せるなどとは、思いもよらなかったろう。そういう生々しいことがらは、普通は士大夫の詩では表現されないからである。しかし杜甫はそれをさらりと詩に作ってみせた。

杜甫に、なぜそういうことができたのか。それは詩人の個性だと言わざるを得ない。しかもその個性は、当時の人に近いと言うよりは、むしろ近代人の我々に近い感覚である。なぜ千三百年もの時空を越えて、そういうことが可能であったのか。それは杜甫が時代から突き抜けた、感性の持ち主で

あったからであろう。

詩の最後は、うらめしくも悲しい葦笛の音が、高楼から聞こえ来て、寂しさで胸がふさがってしまうと結ぶ。そのわびしい情調は、前半と呼応し一致する。とすれば、起承転結の転の部分だけが、美女がいいとか、萍の実がいいとか、欲求する、否、想像する中身を描き出して、突出していることになる。あたかも、暗く静かだった山容から、赤いマグマが一瞬の噴火で噴き上がり、すぐさま鎮静化して、もとの静かな山の姿にもどるかのようである。

杜甫にこんな句があることを、知らない方がよかったのかもしれない。しかし山の噴火でわれわれは、地球の本当の姿に一歩近づくことができる。この詩の一句があることによって、より深い杜甫理解にひとつ迫ることができる。それは、人間味のある、より我々に近い生身の詩人の姿である。しかし、そういう我々と等身大の人間が、実はああいう壮絶な生き様をして、多くの名作を残していることに思い至れば、そのことがかえって、我々常人とは違う杜甫のすごさを、見せつけることにならないだろうか。

二　いまだ妻子を　捨つるあたわず

唐代は、玄奘がインドから仏典を持ち帰って、多様な仏教思想が発展し、則天武后が道教よりも仏教を優先させ、寺院も多く作られ、中国仏教の最盛期と呼ばれている。

詩人では、王維が「詩仏」、李白が「詩仙」、杜甫が「詩聖」と称されている。しかしそのなかでも杜甫の仏教への熱心さは、彼を「詩聖」と呼ぶよりは「詩仏」と呼んだほうがいいぐらいだ、という意見さえある（郭沫若『李白与杜甫』）。

たしかに、青年期から晩年まで一生を通じて、杜甫の仏教に関する言及は少なくない。杜甫の育った家庭環境も仏教信仰に篤かった。そして彼自身、旅のなかで各地の寺院を訪問し、多くの仏僧と交流し、仏法を求め参禅した。禅宗だけではなく浄土宗への関心も深かった。

中国の士大夫は、幼少のころから科挙の試験に備え、儒教経典をそらんじ、経学を学んだ。かくて二、三十年もすると、経世済民の抱負に燃える、有為の青年官僚となっていた。だが官界で行き詰まり、左遷の憂き目にもあうと、老荘思想や隠遁にひかれ、その一方、日常生活では現世の御利益を得るためにも道教の神々を祭った。齢を重ね、何度も不幸に見舞われ、人生の不条理や死について考え始めると、仏教に傾く。これは、あくまで単純化した場合で、必ずしもその通りに継起するわけではない。が、それらの思想が衝突することなく同居しているのが、中国士大夫の精神世界ではなかろうか。士大夫はその場面場面で、その都度、最も有効な思想を取りだし、それを頼りに生きていくことができる。

杜甫とてその例外ではない。ただ杜甫に仏教への言及がとりわけ多く見えるのは、彼の詩人としての資質にもよるところがあろう。他の人が仏教に対する自己の心情表現をタブーと感じ、それを敢えて詩に表さないときでも、杜甫は赤裸々に詩にうたう。仏教に限らないが、一生の後先で、互いに矛盾し、齟齬をきたすような心の在り様を、あるがままにみつめ、そのまま詩に描いていく、杜甫はそういうタイプの詩人だった。だから、多いのは仏教への発言に限らない。儒教は言うに及ばず、老荘、道教への言及も少なくないのである。

[2055_謁真諦寺禪師]

次の詩は、大暦二年の秋か冬、夔州で作られている。

謁真諦寺禪師　　真諦寺の禪師に謁す

蘭若山高處、　蘭若は　山高の処
煙霞嶂幾重。　煙霞　嶂　幾重ぞ
凍泉依細石、　凍泉は　細石に依り
晴雪落長松。　晴雪は　長松より落つ
問法看詩妄、　法を問えば　詩を看るに妄なり
觀身向酒慵。　身を観ずれば　酒に向かいて慵し
未能割妻子、　未だ　妻子を割く能わざるも
卜宅近前峰。　卜宅　前峰に近し

真諦寺をたずね　とくたかき　ぼうさまの　禅師に謁ゆ

この蘭若は　おくぶかき山　いと高き　処にぞある
煙や霞の　たなびくなか　けわしき嶂みね　幾重にぞ　かさなる
凍る泉は　みずの　とけいで　細かな石に　依りそうて　ながる
そら晴れて　雪　きらきらと　長き松の　こずえより　ちり落つ
ほとけの法を　問うてみれば　詩を　看ることは　妄りなり
うつし身を　さとりて観れば　酒に向かいて　慵くおもう
未だ妻子へ　おもいをたち割り　ほとけのもんに　いること能わず
宅ちを卜ない　さだめたるすみか　おてらの前の　峰に　やや　近からん

「真諦寺をたずね、徳の高い僧侶にお目にかかった」

このお寺は、人里離れた静かな、山の高いところにあって、遠く靄や霞がかかるところには、障壁のように立ちはだかる峰々が、幾重にも重なり連なっているのが見える。

清浄な寺の境内には、凍てついた泉から水が融けだし、小さな石に沿いながら流れ下っている。古びた高い松の木の梢に積もった雪が、晴れ間の日の光を受けながら、ぱらぱらと散り落ちている。

仏の道を問うて、ふかく心に考えれば、詩というものが、でたらめなものだとわかる。仏の教えにそって、この身のけがれに思い至れば、好きな酒にも、心が動かされず、飲むのさえものうくなってくる。

しかし、わたしはいまだに妻子への情愛を断ち切って、出家することができないでいる。とはいえこの夔州の瀼西で、新たに家を定めたところは、白帝城の騒がしい城内から遠く、まるで隠遁の地のような場所である。だから真諦寺の前の奥深い山に、いくらかでも近いと言えるのではあるまいか。

＊　＊

前半四句めまでは、寺のある場所と、その境内の様子を描く。普通の景物描写である。凍てつく泉、日光にきらめく雪片などは、この禅師の高潔な徳を象徴するものであろう。寺の詩では、よくある描写である。ところが後半四句は、人事に関する内容だが、驚くべき極端なことが書いてある。

まず五句めで、仏の説く教えによれば、詩が妄言、虚語だと見てとれるという。詩は、想像力、空想力を存分に発揮し、時には虚構をまじえるものだから、仏教の道理からすれば、詩は妄りなものだとなってしまう。特に杜甫の詩は、イメージが暴走したり、極端な対照や誇張が行われたりする。そのことは作者の杜甫自身がよく知っている。「妄語しないこと」は、在家の仏教信者が守るべき五戒の一つでもある。それぐらいは、杜甫でも若い時から知っていたろう。私が注目したいのは、詩は我が家の家業として、人生の後半を詩人として生きてきた杜甫が、こんなことを言明していることである。しかも詩は妄であると、わざわざ詩を作って、詩の中で述べていることだ。いったいこれは何を意味するのだろう。

また六句めでは、仏法にのっとって我が身を見てくれば、酒に対しておっくうになってきたという。ここは、五句めとの対で、仏法によれば酒が人を懶惰にさせるものだとわかった、という方向での解釈もありうる。それはともかく「酒を飲まないこと」も、在家信者の五戒の一つである。驚きなのは、ほとんどアルコール依存症とも言える酒好きの杜甫が、こんなことを述べていることである。もちろん杜甫はこのあとも、酒を断つことが出来なかったし、酒を飲む詩や、酒を催促する詩はいくらでも書いた。あるいはこの詩だって、すでにもう一杯引っかけて、作っているのかもしれないのだ。それなのに、なぜわざわざ詩に書くのか。

五年前、杜甫は梓州のあるお寺で文公という高僧に会い、仏教の絶対的真理を知りたいと願った。[1145]文公に、てらの上方にて謁ゆ」の詩に次のようにうたう。

甫也南北人、　甫や　おまえは南と北に　ながれ　さすらう　たび人なり
……
久遭詩酒汚、　久しく　詩と酒の　うきよの汚れに　めぐり遭い
……
願聞第一義、　願わくは　ほとけの　第一義の　おしえを聞いて

迴向心地初。　心地の初めに　あたまを迴らし　さし向けんことを

杜甫はこのなかで、自分自身はながらく詩と酒にふけってきて、仏のおしえからすれば身が汚れているのだ、と述べている。

同じ梓州でのこと、牛頭山にある牛頭寺を訪れて詩を作り（[1211_牛頭寺に上る]）、また下山して詩を作った（[1212_牛頭寺を望む]）。

休作狂歌老、　狂うがごとき　歌をつくる　老に作りゆくを　休めよ
迴看不住心。　ほとけをまなび　ものに住われざる心をば　いまいちど　ふり迴り看よ

杜甫はこの詩で、気違い歌のような詩を作り続け、このまま老いていくのをやめよと、自分に言い聞かせ、仏の教えの無執着を、今一度学ばなければならないと考えている。しかし結局は、詩も酒も、やめることができなかった。……そして妻子も捨てることができなかった。

さて、それを述べた七句めの言い方が強烈で、我々をドキリとさせる。普通はこんな生々しい表現は、詩ではなされない。妻子を捨てるという形は、仏門に限らず、道教の修行に専念するとき、隠遁するとき、戦争で忠義に身を投じるときなど、さまざまな場合がある。用いられる漢字もいろいろだが、目的語を「妻子」とした場合に限っても、「割く」のほか、「捨つ」「棄つ」「捐つ」などの動詞が、仏典やその他の文献では、よく用いられている。しかしそのいずれの場合も、杜甫以前に、詩の中で「妻子を、割く、捨つ、棄つ、捐つ」などという言い方をした詩人はいない。

また杜甫はこの時期、夔州の始興寺で、李秘書という人から、天台宗の仏典『摩訶止観』の教えを聞いたことがある（[1931_別李秘書始興寺所居]）。

重聞西方止觀經、　西方のほとけ　止観経のおしえを　重ねて聞けば
老身古寺風泠泠。　老いたるわが身　古寺にいて　風はきよく　泠泠とふく
妻兒待米且歸去、　妻や児は　米もちかえる　われを待てば　ひとまずは　且く帰り去らん
他日杖藜來細聽。　他の日に　藜のつえを　杖つきて　また来たりて　細かに　はなしを聴かん

このように、この時も始興寺で、妻子への断ち切れぬ未練を、詩に詠じていた。

「妻子を割く」という表現に戻ろう。杜甫はこの詩で仏門に帰依できるかどうか、そのための条件がクリアできるかどうか、その内心の葛藤をはっきり言葉に出し、問題の所在、矛盾を突出させ、それを鋭利かつ直截な言葉で表現している。こういう敏感な問題は、普通ならばいくらかヴェールで覆い隠し、曖昧模糊として、もう少し温和な形で表現するところであろう。しかし杜甫には遠慮がない。ある意味えげつない。やりすぎと感じる人もいただろう。本質を単刀直入に突く。そこが、いかにも杜甫らしい。が、そこが人に嫌厭されるところでもあったろう。しかし千三百年の長い年月を経た今では、かえってそういうところが詩人の魅力となっている。

この詩は、寺で高僧の話を聞き、詩作りがみだらなものだとわかり、好きな酒にも気乗りがしなくなったが、それでもやはり、妻子への情愛は断ち切れない、と詠じたものである。仏道へ入門することは私には無理ですと、高僧に対して敗北宣言をしたようなものである。あるいは居直りとも取れる。こんな詩を、杜甫はここで始めて作ったのではない。これまでの人生で、足跡を残してきた至るところで、当地の名刹に遊び、僧と交流を持ち、仏教への傾倒を表明してきた。そして、世俗の縁を捨て去って仏門に入ることができないことを、何度も確認してきた。これは杜甫には、もうほとん

ど想定できる問題提起と、それへの回答である。なぜそういうことを繰り返すのか。結果がわかっているにもかかわらず、仏門に入る手前、ぎりぎりの所まで、僧に導かれていきたい誘惑にかられるのではなかろうか。それほどまでに仏教は杜甫を惹き付けるのである。

ただここで一つ確認しておかなければならないことは、杜甫をとらえたのは、仏教だけではなかったということである。道家思想や隠遁思想にも、同じように最後まで心ひかれた。この三者に共通するのは、俗世を棄て、俗塵にまみれた種々の煩悩から解放されることである。ということは杜甫が、それほど煩悩多き人であったということであろう。それが言い過ぎなら、自己をみつめ、内なる煩悩に、真面目に向かい合うことのできる詩人、であったということである。その結果、杜甫は解脱できない煩悩に、一生悩み続け、その悩む姿をありのまま詩に描き続けなければならなかった。そこがまた、凡夫である我々読者の共感を呼ぶのではなかろうか。

三　詩もて　わが名の誉れの　上がらんや

[1450_旅夜書懐]

永泰元年（七六五）、五十四歳になる杜甫は、成都郊外の浣花草堂を去り、岷江を船で下っていった。楽山を経て、宜賓に至ると、岷江は長江本流に合流する。重慶まで下ると、長江は涪江、嘉陵江の大きな支流を受け入れて、三峡に向かう。三峡に至る前、杜甫は忠州にしばらく滞在し、初秋七月のころ、雲安へ下っていった。雲安まで行くと、夔州はもう目の前で、三峡は夔州から始まる。この詩はその忠州から雲安に下る、途中での作と考えられている。これが実は今日の通説である。（七七〇年三月、船で洞庭湖の南の湘江を、衡陽から長沙に行くときの作とする宋代の説もある。）

しかしこの通説だと、詩中の「星は垂れて平野は闊し」の描写が、忠州・雲安の峡谷地帯に著しくそぐわない。そこに端を発して、松原朗氏は、新たにこの詩の制作時期を考証した（「杜甫『旅夜書懐』詩の制作時期について」一九九〇年）。

氏はこの詩の制作時期を、大暦三年（七六八）の春、三峡を抜け出て江陵へ下る長江の一段だとする。周到な考証を踏まえる氏の論点は多岐にわたる。主な論点のみ、私なりにまとめ直せば、「細草」は、詩ではほとんど春に用いられ、秋ではないこと。「平野闊」が忠州から雲安の景観に合致しないことは、杜甫の他の詩や、同時代の他の詩人の表現からも確認できること。「大江」はもっぱら湘江を除く長江水系にしか使用されないこと。就官を断念せざるを得ない「老病」の状態が雲安以前には無く、夔州以後のことであり、療養中の雲安期においてさえも、まだ官界への復帰に意欲を示していること、等々である。さらに、「細草」「平野闊」「老病」の状況は、七六九年以後の、湘江を上り下りする時期にもあり得るが、湘江を「大江」と詠っている用例が杜甫にはないことから、その可能性は無くなり、七六八年の、三峡を抜けて江陵へ下る一段にしぼられてくる、と氏は結論づける。

私には、この松原説はほとんど覆しようのないものに見える。杜甫は大暦三年の正月中旬に夔州を去り、三峡を抜け出たところで宜昌、さらに宜都、松滋を経て、二月に江陵に着いている。宜都を通過し、松滋から江陵に到る間に、たしかに詩に言うような平野が豁然と広がる。

私はこの松原説を踏まえて、さらに若干の調整を行い、時期を絞りこんで四ヶ月後の、七月十五日、満月のころにこの詩を置きたいと思う。

旅夜書懐

細草微風岸、
危檣獨夜舟。
星垂平野闊、
月湧大江流。
名豈文章著、
官應老病休。
飄飄何所似、
天地一沙鷗。

旅夜　書懐

細草　微風の岸
危檣　独夜の舟
星垂れて　平野闊く
月湧きて　大江流る
名は豈に　文章もて著れんや
官は応に　老病にて休むべし
飄飄として　何の似る所ぞ
天地の　一沙鷗

旅の夜に　むねの懐いを　書きしるす
細かな草の　微かなる　風にそよぐ　かわの岸べ
危き　檣　きしにもやい　独りねの　夜をすごす　舟のなか
星はひくく　ちに垂れて　平たき野はらは　闊びろと
もち月は　かわもより　湧きのぼり　大江は　ひがしに流る
わが名のほまれ　豈に　わが文章もて　よに著れでんや
官びとにと　なるのぞみ　応に老いと　病がために　休みておわりぬ
飄飄と　ただよう　わがいのち　ほかに何の　似たる所ぞ
天　地の　あいだにただよう　かわの沙べの　一わの鷗

「旅先の夜、わが胸のうちを詩に書きつける」

岸辺には、小さな草がはえて、そよ風になびいている。あやうげな高い帆柱の舟を岸辺にもやい、私は家族から離れ、ひとり舟の中で夜を過ごしている。

星が地に触れんばかりに、低く垂れ下がり、平らな野原がどこまでも開け広がっている。丸い月が、長江の東の水平線から湧いて昇り、長江は東へと流れていく。

詩人としての名声が、私の作品によって、世に広く知られることなどがあろうか。また官に就くという私の希望も、この老齢と多病によって、万事休すとなってしまったのだ。

ふらふらとあちこちを旅してまわる私の人生、いったいどんなものが、こんな私の人生に似ているのだろうか。それは、この広い天地のなかで、ふわふわとただよって飛ぶ、あの砂浜の一羽のかもめ、そのかもめにこそ似ているのだ。

＊　＊

四句めの「月湧きて大江流る」の句から考えられるのは、日没とともに、東の水平線から昇ってくる大きな月がふさわしい。同時に星も見えてくる。この句は「月は大江より湧き、大江は流る（月湧於大江、大江流）」の意味で、「大江」が二つの役割を兼ねる、いわゆる兼語の語法である。上の句も、その対句で同じ構造となり「星は平野に垂れて、平野は闊し（星垂於平野、平野闊）」である。月が大江より湧くというように、杜甫は東西に流れる長江、あるいは水面が東西に長く広がった長江の、東から昇る月の出を、船の中から見ている。月が地平から昇るのを見ることができるのは、満月以後の月である。満月以前の月ではない。なぜなら満月以前の月ならば、空が暗くなりようやく月が見えはじめる頃には、月はすでに空に昇っていて、月の出を見ることはできないからである。

満月は、夕方に東の水平線（地平線）から昇りはじめ、明け方に西に沈む。それ以後、月が地平から昇るのはだんだん遅くなる。同時に月の形は次第にかけてくるが、十七夜ぐらいまでは、満月に近く見える。二十五、六夜になると、真夜中過ぎから朝方に向かうころ、三日月とは左右が逆の形をした月がようやく昇ってくる。しかしやがて太陽が昇ってくるので、月は見えなくなる。月が長江の水平線から昇るのを、見ることができる可能性は、確かに満月から二十五、六夜過ぎまで、十日ほどありうる。しかしこの詩で言う「月は大江より湧く」というのは、逆三日月型の細い月が、真夜中過ぎから夜明けの時間帯に、昇ってはまもなく消える、という状況は想像しにくい。それだと月が萌え出づるという語感だ。杜甫は以前、二十四、五夜の細い月を「あさがたの四更（しこう）のとき山は月を吐く」[1717_月]と表現したことがある。以上いずれも、おおざっぱに北半球の緯度三、四十度あたりでのことだ。

私は松原説に拠りながら、若干の調整を加えて、はじめにも述べたように、大暦三年の七月十五日、満月のころの作としたい。というのは、三月の江陵到着時の作だとすれば、杜甫は家族と一緒であり、詩に「独夜」とあるのと矛盾するからである。たしかに士大夫が官界から疎外されたり、退けられたりしているとき、家族が傍にいても、「独夜」と表現することはありうる。しかし杜甫の場合、華州の官を棄て、家族とともに秦州へ旅だってからは、基本的に官界を去っており常に家族と一緒である。だから、独りの夜とあるときは、杜甫が家族から離れて独り夜を過ごしている状況と考えてよいだろう。

杜甫はもう一ヶ所「独夜」を使っている。二年前、夔州に到着した年だが、杜甫はひとり西閣で夜を過ごし、家族は赤甲の家に住んでいた。そのときの夜を「空山に独り夜をすごして旅の魂は驚く」[1709_夜]と詠っている。また、それより前、まだ成都城内に住み込み、厳武の幕府に仕えていたときも、家族は郊外の浣花草堂に住んでいたので、「江城に独り宿る」[1405_府に宿る]と表現している。このように杜甫にとって「独夜」は、家族から離れた独りの夜なのである。

江陵到着後は、家族を弟の杜観のもと、江陵北の当陽に住まわせ、杜甫は江陵府にいて、高官たちに会ったり、宴会に出たり、詩の応酬をしたりしていた。春から夏までの期間である。

その後、夏から初秋の時期にかけて、杜甫は金策のため、江陵から西方面の、ある他所の県へ船旅をした。その時の事情は「わが帰る路はふるさとの北に関するに非ず、わが行く舟は却って西に向う」「我行きゆきて何ぞ此かるところに到るや」「（江陵とは）異なる県に虚しく往くに驚く」（[2150_水に宿り、興を遣り、（江陵の）群公に呈し奉る]詩）などと述べている。この時も杜甫は、家族から離れて独りで夜を過ごしていた。

実はこのとき、この[2150]詩のあとに、立て続けに五首の詩を作っている。[2151_遣悶]［2152_江邊星月］二首［2153_舟月對驛近寺］［2154_舟中］である。この五首に描かれた状況と［旅夜書懐］が、非常によく似ている。その五篇の二番目に［旅夜書懐］を置くと、詩はきれいに収まる。その配列で十五夜前後の状況を再構成してみよう。

まず［2151_むねの悶をそとに遣る］の詩では、からりと開けた地と平らな川の岸辺が描かれ、日没前の夕方、月はすでに昇っており、川面には月光が反射している。だから満月の前の夜ぐらいであろう。

地闊平沙岸、　地は闊く　平らかなる　かわの沙べの岸

……

江風借夕涼。　江に　ふきわたる風に　夕べの涼しさを借る

行雲星隠見、　ながれ行く雲に　星は隠れ　また　見れみえ

疊浪月光芒。　畳なわる　浪だつ　かわもに　月の光芒は　きらめく

［1450_旅夜書懐］の詩では、日没直後に、満月が長江から昇り、広がる平地の地平線の上には星が垂れ、岸辺の小さい草にはそよ風が吹き付け、ひとり夜をすごしている。

［2152_江辺の星と月、二首］其一には、

驟雨清秋夜、　驟の雨に　秋の夜は　清らかとなり

金波耿玉繩。　金波のつきひかりに　玉繩の　ほくとのほしは　耿かなり

……

縁空一鏡升。　空に縁りて　一つの鏡のごとき　まろき　つき　升りたり

とあり、にわか雨で空気が清らかになったあと、鏡のように丸い月が昇ってきている。昨日よりは昇るのが少し遅いので十六夜ぐらいであろうか。北斗七星も月光に照らされているかのように明るい。

其の二では、夜明けがた、その満月が西の空に沈み、空も明るくなって星も見えなくなった。

江月辭風纜、　江のうえの月は　風にただよう纜を辞しさって　しずみゆき

江星別霧船。　江のうえの星は　霧のなかの船に　別れをつげて　きゆてゆく

雞鳴還曙色、　鶏は鳴きて　還た曙の　そらの色となり
……　……

また［2153_舟をてらす月　駅に対し寺に近し］では、杜甫は夜遅くまで眠らずにいる。灯火など必要ないほどに、月が明るく船内を照らし出している。

更深不假燭、　更は　深けゆくも　燭のあかりを　假ることなく
月朗自明船。　月のひかり　朗かにして　自ら船を　明るくす
……　……

皓首江湖客、　皓き首となり　江や湖にさまよう　客のわれ
鉤簾獨未眠。　簾を　まきあげ　鉤にかけ　独り　未だ眠らず

さらに［2154_舟の中］では、満月の翌日を詠じている。したがってこの日は十六夜か十七夜かであろう

今朝雲細薄、　今朝がた　雲は　細く薄く　たなびき
昨夜月清圓。　昨夜は　月は　清らかにして　円かなり

このように満月を中心に、ほぼ毎夜詩を作っているのだが、実は同じようなことが以前にもあった。一年前の夔州時代である。題に十五夜、十六夜、十七夜と連続する詩がある。［2010_八月十五夜月、二首］其一では、満月を「目を満たして明るき鏡の飛ぶ」と詠じ、其二では、明け方に満月が沈んでいく様子を描いている。［2011_十六夜、月をめで　玩ぶ］では「旧は　金波のつきひかりの　爽らかなるを挹いとり」と詠じ、［2012_十七夜、月に対う］では、「秋の月の仍お円かなる夜」のように、十七夜も月がまだ丸いことを述べている。

さらにこの五篇に共通する漂泊感も、［旅夜書懐］と一致する。かりにいま［2154_舟の中］から例示すれば、

飄泊南庭老、　飄ようて　ふな泊りす　われは南の　はてなき庭にさまよう　老いぼれじい
祇應學水仙。　祇だ応に　みずべにすみし　かの水仙と　よばるるひとを　学ぶべし

と歌う。自分を、最果ての南の、だだっ広いところを、落ちぶれてさすらっている老人だと言い、川や湖の水べに生き、死後はやがて水辺の仙人と称された人達を、学んだほうがいいと述べている。この感懐は、広き天地の間の飄々たる一羽の鷗、と同じである。

最後に一つ付け加えておくと、「細草」は松原氏の指摘するとおり、春にこそ最もふさわしい。ただ秋の詩にもきわめて少ないが用例が無いわけではない。たとえば一例を挙げると晩唐の喩坦之の詩に、

日生滄海赤、潮落浙江清。　日生じて滄海は赤く、潮落ちて浙江は清し
秋晩遙峰出、沙乾細草平。　秋晩れて遙かなる峰の出でみえ、沙乾きて細き草は平かなり

（「題樟亭驛樓」全唐詩巻七一三）

とある。

以上から［旅夜書懐］の制作は、松原説を踏まえたうえで、さらに独夜の意義、満月の推移、詩の編次、共通する漂泊感などをテコに、若干の調整

を施し、以下のように考える。

（一）制作時期は、七六八年、杜甫が三峡を出て江陵に到着した後、いったん家族を当陽に安置し、さらにひとり江陵から他所の県に、船に乗って金策に出かけていた（あるいは帰ってきていた）初秋のころ。

（二）場所は、松滋から公安あたりまでを含む江陵周辺で、長江が東西に流れる（あるいは東西に広がった）一段で、その船の上。水面から仮に五メートルの高さに杜甫がいたとしても、十キロ先までぐらいに山などの障害物がなければ、月が水平線から昇る情景を見ることができる。江陵周辺の長江には、そのような景観は少なくないと思われる。

（三）詩の制作状況は、旧暦初秋七月十五日（西暦七六八年九月四日）ごろに現れる満月をみながら作ったであろう。そしてその日に前後して二、三夜の間に連続して作られた、一連の詩の中に置いてこそ、［旅夜書懐］の詩はもっとも矛盾なく読める。

私の仮説は右の通りである。その当否はひとまず置くとして、こうしたあれやこれやの読み返し、作業の試行錯誤を通して、詩の読みは少しずつ進展していくものと思われる。それはともかく、たかが一篇の詩の制作時期が、かくも重要になってくるのはなぜか。それはこの詩が有名で、その影響力が大きいからである。不公平なようだが、あまり有名ではない他の詩人の詩なら、これほど取り立てて騒ぎ立てる意味はないであろう。私生活上のささいな事がらが、有名人なら世間に大きく取り沙汰されるのに、一市井人のそれだと話題にならない。それと同じ理屈である。

四　漁民の舟に　隣り合わせて　舟泊まりす　［2154_舟中］

杜甫は夔州で、いくばくかの農業経営や、夔州長官たちの援助によって旅費をたくわえ、旅装を整えていた。弟の杜観と江陵で合流する計画をたて、江陵府の諸方面の関係者にも連絡を付け、用意万端、満を持して三峡を下っていった。大暦三年（七六八）、五十七歳、正月中旬のころである。途中、いくつかの町に立ち寄りながら、二月に江陵に到着した。

ところが、どういう事情があったのかはわからないが、江陵入りする前から、状況は芳しくなくなっていた。江陵では、家族を江陵北の当陽に安置し、杜甫は府の役人や友人らと社交活動を繰り広げ、地方の最高権力者の衛伯玉の宴席にも侍った。

しかし、かつての成都や夔州でのように、杜甫はこの地の最高権力者から優遇されることはなかった。府の高官たちからの援助もたいして得られず、ひどくお金に困った。当陽に離れ住んでいる家族からは、経済苦を手紙で訴えてくる始末だった。杜甫は江陵から西方面へ、お金を工面する旅へ出かけなければならなくなった。次の詩は、そのようななか、前節の「旅夜書懐」と同時の作で、初秋の候、一夜明けて船の中で迎えた朝を描いている。

舟中　　舟中（しゅうちゅう）

風餐江柳下、
雨臥驛樓邊。
結纜排魚網、
連檣並米船。
今朝雲細薄、
昨夜月清圓。
飄泊南庭老、
祇應學水仙。

風に餐す　江柳の下
雨に臥す　駅楼の辺
纜を結べば　魚網　排し
檣を連ねて　米船　並ぶ
今朝　雲は　細薄に
昨夜　月は　清円なり
飄泊す　南庭の老
祇だ応に　水仙を学ぶべし

舟の中にて

ふきさらしの風のなか　ゆうげ餐うは　江べの柳の　こかげの下
ふりかかる雨のなか　臥していぬるは　にぎわしき　駅の楼　ちかき辺り
纜を　結びてふねを　もやいしところ　魚とり網　ほされて　排び
檣を　いちれつに連ねつつ　米はこぶ船ぶねの　並びうかぶ
今朝がた　ふねより　おきくれば　雲は　細く薄く　そらにたなびき
昨夜は　はれて　もち月の　よぞらに清く　円かなりけり
飄うて　ふな泊りす　はてなき南の　庭にさまよう　老いぼれじい
祇だ応に　みずべにすみし　かの水仙と　よばるるひとを　学ぶべし

「舟の中に寝泊まりして」

舟で移動するこのごろの私ときたら、ちゃんとしたところで、飲み食いも寝泊まりもしていない。食事と言えば、吹きっさらしの風のなか、川辺の柳の木のもとで、そそくさと夕餉。横になって休むのは、にぎやかな駅前通りの、高楼の近く、雨の降りかかる中での野宿。たとえば、そんなみじめな旅を続けている。

夜が明けると、私の舟が停泊したところには、漁民たちが干した、魚取りの網が横にずらりと並んでいた。また米を都へ輸送する船が、帆柱を縦一列にならべて、碇をおろしていた。

今朝がたは、うっすらと雲がたなびいている。昨晩は満月が、あんなにも白く輝いて、晴れた夜空にかかっていたというのに。

私はこうやって、最果ての南の、だだっ広いところを、落ちぶれてさすらっている老人にすぎない。こんなことでは、水辺の仙人たちを学んだほうがいいというものだ。その人たちは川や湖の水べに生き、死後は神に祭られたり、水辺の仙人と称されたりしたのだから。

＊　＊

冒頭から対句で作られている。一、二句めが「風に餐す」「雨に臥す」で始まり、分かりやすい対句である。

杜甫は、川辺の柳の樹の下で、さえぎる物も無い、吹きさらしの風のなかで夕食をとり、駅前の繁華街で、夜の雨を避けながら、楼閣のそばで眠っている。この状況を文字通りに受け取れば、このとき杜甫はずいぶんとひどい、野宿に近い旅を続けていたことになる。

しかし本当にそうであろうか。これは、日本語でも「風餐露宿（ふうさんろしゅく）」で熟語になっているように、旅の苦しさを言うときの喩えの表現である。本場の中国では、使い古された感さえあり、飲風（風に飲す）、餐露（露に餐す）、水棲（水に棲む）、水宿（水に宿る）、雨沐（雨に沐す）等々、その表現のバリエーションは多い。たとえれば、それに近い生活だったということになり、この部分は、写実的な描写ではないことに注意しなければならない。

しかし三、四句めの景色は新鮮である。このような景色の描写は、他にあまり用例が無く、内容が具体的であり、実写と考えられる。杜甫が船泊まりしたところには、すぐそばに漁網がずらりと干されていた。漁民たちの漁業労働のための道具が、日に干され、むき出しのままで、杜甫の船のすぐ近くにあったのである。またマストを連ねて、米穀の運搬船が並んでいた。安史の乱で中原が戦場となってからは、長江以南の米穀に対する食糧の依頼度は、ますます重要となり、運搬船が頻繁に南北を行き来していたであろう。いずれにしろ穀物の輸送船には、下層の労働者が汗を流していたはずである。

漁網という漁具が、唐詩のなかで描かれないことは無い。しかし今残されている十数例の用例を見てみると、それらはみな外部から見た、風景としての漁網であり、杜甫のように、漁業労働の現場にある生々しい生産用具を、間近から見たものではない。さらに米船となると、杜甫の用例があるのみである。

もちろんこんな景色は、景色それ自体としては、港町にはありふれたものだろう。しかし、おそらく官僚たちの乗る船ならば、そんな場所には係留されなかったに違いない。問題は、杜甫の乗った船が、汗臭い或いは魚臭（さかな）い労働現場のただなかに、横付けされていたことである。そこまで杜甫の生活が落ちていたことを、我々はまず知ることができる。こうした伝記的事実を確認することができるほかにも、そのような現場の景色を杜甫が詩に書き込み、そのことによって、唐詩に新鮮な風景描写を、もたらしている。そのことも、また重要であろう。恵まれた地方赴任旅行をした高級官僚には、決して見えてこない風景、そして彼ら官僚詩人には決して書き得ない風景描写であったろう。生活の貧困は、芸術の豊穣をもたらすというドグマがここでも実現されている。

さて、再び詩の構成に目を向けてみよう。以上の詩の前半の四句で描かれた景色が、結聯の「漂泊」の語で、受けとめられている。自分はこんなひどい所にさすらっているのだと、杜甫の悲哀感につながっていく。したがって、意味の上からは、残りの五、六句めの「今朝～」と「昨夜～」の句は、無くても構わない。「風餐」「雨臥」「漁網」「米船」で、もう十分に漂泊の状況を言い得ている。

しかし、五、六句めのこの「夜の月」と、「朝の雲」の二句がなかったとしたら、どうであろうか。おそらく詩は、意味上で一直線につながり、広がりが無くなったであろう。じつはこの五、六句めの「転」の聯が、場面の転換を果たすという役割を、十二分に果たしており、さらに詩に、驚きという臨場感をもたらし、詩が生き生きと動きだす効果を発揮している。

漁網や米船と隣り合わせにいることを、船泊まりした昨晩まで、杜甫ははっきりとは認識していなかった。朝になって気付いたのである。昨晩の様子は、前節でも紹介したように、この詩の直前に配列されている［2153_舟月對驛近寺（舟のうえの月のよる、ふなどまりするは、駅に対うて寺に近きところなり）］の詩に、夜の様子が次のように、描かれているに過ぎない。

更深不假燭、　更は　深けゆくも　燭のあかりを　假ることなく
月朗自明船。　もち月は朗かに　自ら船を　明るくす
金刹青楓外、　つきよのもと　金じきに　かがやく刹は　青き楓の　こだちの外に
朱樓白水邊。　朱き樓は　白じろと　てりかえす　水の辺りに　そびえたつ

ところが、翌朝起きてみると、昨夜はあんなに清らかな満月だったのに、今朝は薄雲がただよっている。そして自分が漁網や米穀運搬船の、ただ中にいることに気付いたのである。その驚きが、杜甫の漂泊感を一層強めることになっている。この起承転結の聯の構成は、いかにも絶妙にできている。

五　酩酊し　人にたすけられ　帰るにまかせん

［2214_宴王使君宅題二首］其二

大暦三年の夏、杜甫は江陵をしばらく離れ、ひとり金策の旅に出かけた。前節で述べたとおりである。しかし、思わしい結果は得られなかった。秋には再び江陵へ戻ってきたが、杜甫に援助の手を差し伸べる者はいなかった。これ以上、江陵に滞在し続けることはむずかしくなった。江陵にいたのは、春から秋までの半年ばかりである。杜甫はふたたび家族を引き連れ、確実な目当てがあるわけでもなく、さらに数十キロ南の公安に向かった。

江陵を去るに当たって、世話になった友人に詩を送り、そのなかで自分のことを「我が百年の一生は廃物、棄物と同じ、広き中国の地も、みな行き詰まりの袋小路」だと述べている。

更欲投何處、　このさき　更に　何れの　処にか　わがみを　投ぜんと欲る
飄然去此都。　ひらひらと飄然として　われは此の　みなみの都を　去りゆかん
……　……
百年同棄物、　百年の　しょうがい　われは　棄てらるる　物に同じ
萬國盡窮途。　ひろき万国も　尽く　われには　でぐちなき　窮まりの　途なり

（［2205_舟出江陵南浦、奉寄鄭少尹審］）

江陵から数十キロ南の公安に着いたのは晩秋の候であった。しかし公安でも有力な支援者は見つからなかった。

ある日、杜甫は、今は引退して公安に引っ込んでいる王氏なる人物の自宅に招かれた。故郷が荊州の人で、もとはどこかの州の長官であった。杜甫は王氏に一席設けてもらったので、そのお礼に詩を作った。

宴王使君宅題、二首、其二　　王使君が宅に宴して題す、二首、其の二

泛愛容霜鬢、　泛愛　霜鬢を容れ
留歡卜夜閒。　留歡　夜閑を卜す
自吟詩送老、　自ら詩を吟じて　老を送り
相對酒開顏。　酒に相い対して　顔を開く
戎馬今何地、　戎馬に　今　何れの地ぞ
鄉園獨在山。　郷園　独り山に在り
江湖墮清月、　江湖に　清月堕ち
酩酊任扶還。　酩酊して　扶還に任す

使君の王どのが宅に　宴して　このうたを題く、二首、其の二

泛き愛を　およぼして　霜ふりの　ましろき鬢の　われを　うけ容れ
留めて　歡びきわめんと　夜の閑なるを　トい　えらべり
自ら　詩つくって吟み　老いさきの　のこんのときを　送りきぬ
相いに　こよい　酒に対えば　うれいの顔も　ほころび開く
戎と　いくさ馬の　はびこる今のよ　ふるさとは　何れの　地にやある
ただ　きみが郷　園やはたけ　独りこの山に　在りてのこるは　さいわいなり
よもふけて　江と　湖の　ひろがるところ　清らけき　月も堕つれば
われ酩酊し　あしふらつきて扶けられ　つれ還さるる　ままに任せん

「州の長官の、王氏の屋敷で酒盛りし、この詩を書き付けた。二首」その二

王氏は、博愛の精神に富む、友情にあつい御仁で、鬢の毛まで真っ白になったこのわたしを呼んで、酒盛りを開いてくれた。わたしを引き留め楽し

みをつくそうと、のんびりとした今宵のこの時を選んでくれたのだ。

わたしは自分で詩を作り、それを吟じ、そうやって四十代の終わりから、残りの人生を過ごしてきた。今日、あなたと向かい合って、こうして二人して酒を酌み交わせば、憂い顔は消え失せて、気持ちはほがらかになってくる。

到るところ戦乱がはびこり、国土が荒廃してしまった今の世に、懐かしい故郷などというものが、いったい何処にあるというのか。ところが王氏だけはこの山に、故郷の田園が荒れずにそのまま残っていて、幸いなことである。

夜も更けて、長江や湖の広がるこの地に、澄んだ月が沈んでいき、やがて宴もお開きとなる。わたしはすっかり酔っぱらって、ひとりでは歩くこともできない有り様。人に支えられながら家まで、送り届けてもらうがままに任せておこう。

＊　＊

冒頭の一句が、ひどく卑下しているように見える。相手の王氏は、もとは州の長官ほどの中級官僚で、今は現職ではない。その人を杜甫は「泛愛」の人と呼び、自分を霜のように、白い髪となってしまった一老人と言う。この「泛愛」は、唐詩に四例しか見いだせず、みな杜甫が使う。しかも杜甫の使い方には特徴があり、すべて大暦三年以降、江陵に下ってからであり、みな友人という意味で用いている。元来、あまねく人を愛するの意味で、ここでは自分にも恩情を及ぼしてくれる、王使君を指している。

ほかの三例は、一つは間もなく江陵に、到着しようとする時の詩で、江陵節度使の幕府の役人たちに、あらかじめ挨拶を送って、「蒼茫として　泛愛の前」と詠じる。当てどころなく、この先どのように生きていくのかさえ分からない、そんな自分が、泛愛なるあなたたちの前にいます。だからどうかそんな私を、あなたたちの広い愛で受け入れて下さいと、その人たちに情けを請うている。([2132_行くゆく古城の店に次り、江に泛びて作る。]) 鄙びて拙きを揆らず、江陵幕府の諸公に呈し奉る])

残りの二例は江陵よりさらに南の、潭州で作った詩で、亡くなる一年前である。その一つ、左に掲げる詩では、時候の挨拶をしてくる友人はたくさんいるのに、苦況を救ってくれる実質的な友はいない、となげいている。

久客多枉友朋書、　たびさきに久しく客たれば　友朋より　書をば　枉　よせらるること　多く
素書一月凡一束。　素にかかれし　その書は　一月に　あわせて凡そ　一束ともなる
虚名但蒙寒暄問、　なかみもなく虚なる　わが名は　寒さ暄かさ　あいさつ問を　但だ蒙るのみ
泛愛不救溝壑辱。　溝や壑まに　うもれしぬ　辱め　うくるおそれを　泛愛の　ともがらは救わず

[2306_秋の暮に、裴道州どのの　手ずからの札を　枉たまわり、率爾興を遣りて　このうたをつくり、侍御の蘇渙どのに　寄せて遞り呈ぐ]

もう一つは、中央からきた潭州の事務長官の李曛に対して、回りの友人はうわべだけの同情を、私に寄せくれるだけにすぎない、と訴えている。

([2307_判官の李八丈曛どのに贈り奉る])

所親問淹泊、　親しき　所のひとは　淹しく　ふな泊まりする　われを　なぐさめ問い
泛愛惜衰朽。　泛く　ひとを愛す　ともがらは　衰え朽ちゆく　このわれを　かなしみ惜しむ

……　　……
真成窮轍鮒、　真に　われは　轍の　みずたまりに　窮りはてたる　鮒と成り
或似喪家狗。　或いは　あるじに　かえりみられぬ　喪にある家の　狗にぞ　似たる
……　　……
知音為回首。　わが知音なる　おかた　ねがわくは　わが為に　首を回らし　たまわんことを

杜甫は江陵以後、確実な後ろ盾がなくなり、生活が逼迫してきていた。この「泛愛」はそうしたなかで、あまり親しくない人に対しても、好意を乞い求めざるをえなくなってきていることを、反映した言葉であろう。

次に三句めは、詩を作って残りの老年期を送ってきたと述べるが、実は「老」は、もっと若い時期を指しても使われる。たとえば杜甫がまだ四十三歳で、官に就けず、つらい就職運動をしていたとき、杜甫は自分のことを、杜陵出身の、いまだ野にいる老人と呼び、「杜陵の野老　骨は折れんと欲」と詠じている。また「此の老は、声たてること無くむせびなき、涙ながして血を垂らす」と、自分を哀れに描き出している（[0208_投簡咸華兩縣諸子]）。このように四十代以後を、老と呼ぶのはよくあることである。

儒教的処世観では、官人として生きることこそが正統的な生き方である。だから「老を送る」という言い方は、本道にのりそこねた、本来的ではない生き方、正規の人生の余りもの、ということになる。官僚とは為らない生き方なので、中国ではそれは、隠遁を意味することになる。杜甫は、四十八歳で華州の地方官を辞め、それから正規の官職に就いていないので、秦州以後は基本的に「老を送る」人生である。

華州から秦州、成都へと流れてきた杜甫は、五十三歳の時、成都草堂の四本の松の木を、余生を送っていく心の支え、精神の資本になると詠じたことがある（[1326_四ほんの松のき]）。

足為送老資、　この　まつのきは　老を送る　資と　為すに足り
聊待偃蓋張。　偃せて蓋うがごとき　このえだ　のびて張らんことを　聊か待たん

さらに、この詩では「詩を吟じて」老を送る、とも述べている。たしかに杜甫は、官を辞めてからは、詩人として生きることを決意し、それ以後の後半生は秦州、成都、夔州と旅をつづけ、たくさんの詩を歌いながら生きてきた。当時の士大夫は、中途で官を辞めれば、普通は故郷に帰って、荘園で生計を立て、子弟を教育したり、詩文を作ったり、学問をしたりして隠遁生活を送った。杜甫のように、親戚友人の援助に頼りながら、詩人として異郷を旅して生きていくというのは、当時としては非常に稀な生き方であった。もちろん出版界などはまだ存在しなかった。だからその人生は、大変な困難を強いられた。

さて、この「送老」は杜甫が詩ではじめて用いた言葉で、その後白居易が何度も詩に使い、宋代にも影響を与えた。白居易は六十四歳のとき、長安から近い同州の長官（刺史）に任ぜられ、それを断ったことがある。「詔もて同州の刺史を授けらるるも、病にて任に赴かず、因りて懐う所を詠う」の詩で、

誠愛俸銭厚、　その俸給の　お銭の厚きを　誠にわれは　愛おしむも

其如身力衰。　わが身と　力の衰うるを　其如せん
……　……
賣卻新昌宅、　長安の新昌の宅を　売り却い
聊充送老資。　聊か　老を送る　資に充てん

と詠じている。白居易は、杜甫が四本の松を「送老の資」と呼んだ言葉をそのまま使って、売却可能な都長安の邸宅を、老を送る資本とみている。

また白居易は他の詩では、左遷された江州司馬の官や、江南の大藩である杭州の長官を、「送老の官」とも呼んだことがある。中央政治にあまり関係のない地方官や、左遷された閑職に就いていることを、なかば隠遁だと見なすのは、白居易の周辺で流行しだした言い方である。マイナーな状況をプラスに転じる逆転の発想法で、逆境に耐えて生き抜くための智恵である。しかし売るべき邸宅もなく、そんな官にも就いていなかった杜甫は、詩を吟じ詩人として、老を送っていく人生は、すがるべきものと言えば、友人たちの博愛的な支援のみだったのである。

詩の最後は、酒席の宴にあずかったあと、どのように酔っぱらい、満足したかを詠じている。酔態の描き方はいろいろで、杜甫もかつて、酒飲みで有名な李白や張旭ら、八人の酔狂人の酔いざまを、おもしろおかしく描いたことがある。「李白一斗　詩百篇」でおなじみの詩である（[0201_飲中八仙歌]）。しかしここでは、自分自身の酔っぱらった様子を描く。杜甫はこの詩の中で、王使君の大きな恩情に安心して包まれながら、腰もふにゃふにゃに酔っぱらい、自分の身を人にゆだねきっている。杜甫には、ちっぽけな自己の面子や、尊厳やらを投げ出して、もっと大きなものにゆだねるという考え方があるが、この表現はそれに通じる所がある。杜甫の酔っぱらい方の一つの理想が、ここには描き出されているのであろう。この詩は、王使君が酒食でもてなしてくれたことへのお礼だから、相手をほめるのが礼儀である。自分の酔っぱらいの風体を、このように描くことによって、王使君の泛愛をほめ、お礼を述べているのである。

「月堕つ」は、普通は「月落つ」や「月沈む」が使われ、「堕」が使われるのは稀である。この三つは意味の上でも、平仄の上でもほぼ同じだから、どれを用いてもよかったであろう。しかし、ここで杜甫が自分の身体を、酔って人に任せっぱなしにしているのは、いかにもくずれ落ちる語感のある「堕」の方がふさわしい。

六　もっとも　小役人にぞ　軽んぜらるる　[2218_久客]

大暦三年（七六八）の冬、五十七歳、公安での作である。この年の正月は夔州を去って江陵に至り、秋には江陵を離れて公安に来た。年末にはさらに岳陽に下る。以後、杜甫は、各地の友人、知人を頼って湖北、湖南省の両湖一帯を船旅で転々とする。

老病で官にも就けず、戦乱で故郷の荘園も荒れ果て、生計の手立てをもたない杜甫は、もっぱら地方官となっている彼らの好意にすがるしかなかった。だが、それだけではなく、その後の長沙では、漢方薬の薬材を売っていたこともあるし、機会があれば、学問や詩作の指導をして生計の足しにもしていた。その痕跡が詩に残っている。しかし商業的な出版文化など存在しない当時にあっては、やはり人の援助に頼るしかなかった。作家として経

済的に自立していくには、あまりにも時代が早すぎた。最初は、援助をしてくれた人も、滞在が長引くと、次第に不機嫌になっていくのは人の世の常。とくに杜甫の詩学の深さを理解しない現地の小役人たちは、杜甫を老醜の外貌だけで判断する。

知人達の心変わりや、小役人たちのあからさまな蔑視の視線に耐えられず、また杜甫は場所を移っていく。洞庭湖附近のどこかで客死する大暦五年の冬まで、残された二年間を、杜甫はこのようにして流れ歩く生活を送らなければならなかった。

次の詩からは、その流浪の生活のみじめな実態が見えてくる。しかし杜甫の詩は自分の不幸を嘆くだけには終わらない。さらに国の不幸へと広がっていく。今日から見ると、そこに杜甫の詩の救いがあったといえよう。

久客

羈旅知交態、
淹留見俗情。
衰顔聊自哂、
小吏最相輕。
去國哀王粲、
傷時哭賈生。
狐狸何足道、
豺虎正縱横。

久客

羈旅に　交態を知り
淹留して　俗情を見る
衰顔　聊か自ら哂い
小吏　最も相い軽んず
国を去って　王粲　哀しみ
時を傷んで　賈生　哭す
狐狸　何ぞ道うに足らん
豺虎　正に縱横なり

久しく　客となりて
羈また　旅にくれ　ひととの交わり　まことのあり態　しみじみと知り
たびさきに　淹しく留まり　俗の情け　あつきうすきを　まざまざと見る
衰えし　わが顔　かえりみて　聊か　自ら　あざけり哂うは
小さき　しもの吏びと　最も相を　軽んずればなり
むかし　王粲　いくさの国を　のがれ去り　哀しく　みやこを　なつかしむ
時のうごきに　こころ傷めて　賈生は　こえ　はりあげ　哭けりとぞ
狐や狸の　ちいさきわるもの　何ぞ　いちいち　道うに足らんや

豺(おおかみ)や虎(とら)の　だいあくとうぞ　正(まさ)に　わろきおこない　縦横(ほしいまま)に　しほうだいなる

「長らく他郷に旅人となって」

旅人として他所に身を寄せると、人との交わりで、世間の態度がいかに冷たいかが、よく分かる。長いあいだ見知らぬ土地に留まると、俗世間の人情がいかに薄いかが、よく見えてくる。

身分のある人々より小役人のほうが、かえってわたしを見下してくる。鏡にうつった自分の衰えた顔をみると、それも無理なからぬことと、自嘲気味に自分で笑ってしまう。

魏の詩人の王粲(おうさん)は、後漢末の動乱のために、都の長安を去って南のかた荊州(けいしゅう)に下り、望郷の念に涙した。前漢の博士出身の賈誼(かぎ)先生は、当世の社会不安を憂えて天子に建言し、声をあげて泣いた。わたしも、ちょうど彼らの境遇と似ているところがある。

狐や狸のような小悪党、下役人は、わざわざ取り立てていうほどのものではない。問題は、豺(やまいぬ)や虎のような大悪党、逆賊が、勝手気ままに悪事のやりたい放題であることだ。

＊　＊

一、二句めは、世間の人情の薄さは、旅でこそよくわかると述べる。もちろんその反対の場合もある。不自由な旅で、人の親切、温かさを身にしみて感じた、などという例は山ほどある。どちらも正しかろうが、公安という土地で、杜甫は世の薄情をひしひしと感じた。よほど身にこたえたのであろう、一、二句めを「互文(ごぶん)」の修辞を用いて強調している。

ここでいう互文とは、上句と下句の一対の中で、それぞれの主部と述部を入れ替えても意味が通じ、それぞれ二つの主部と述部を、総合して意味を考えるものである。例えばこの詩で上下句の主部と述部を置き換えて、旅のなかで俗世間の薄情さを見ることになり、長居してはじめて人と人の交わりの実態を知る、と言っても同じことである。互文は結局は、同じ趣旨を繰り返すことになるのだが、イメージが重層的になり、広がりをもつ効果がある。ただこの場合は、ほぼ同義反復に堕し、言葉数が多い分だけ、冗長に流れている感を否めない。ただし同じ事を冒頭から二回も繰り返されるので、杜甫のこの時の屈辱感、やりきれなさが、読者の頭によく入ってくる。

三、四句めは順接としてでも、倒置としてでも読むことができる。順接なら、みすぼらしさを自分でも笑い、小役人にも軽んぜられる、となろう。しかしそれよりは、倒置として読んだ方が動的である。押韻の都合で倒置になったとも考えられる。思いがけず小役人に軽んじられてしまい、なぜかと鏡に姿を照らしてみたら、この衰えはてた顔ではさもありなんと、腹を立てるより先に、自らをあざけり笑ってしまった、というようにである。このように、どちらも解釈可能で、どちらが正しいと判定できない場合、詩をよりよくする方向で読んだほうがいいであろう。作品にむかう鑑賞者のスタンスの問題にもかかわってくるが、そう読んだほうが作品が持っている可能性を、うまく掘り起こすことができるように思う。

五、六句めに、突然、いにしえの王粲や賈誼の故事が出てくる。もともと「転」の聯だから、急に話題が変わっても当然と言えば当然である。二人

とも漢と魏の時代の著名な学者、文学者で、賈誼は南の長沙に流され、王粲は南の荊州に旅寓して北の故郷を懐かしんだ。みな南方で意を得なかった人達である。二人の不運な運命に、南へ流れてきた杜甫が、自分を重ね合わせていることは明らかである。自らの不遇を、彼らにだぶらせるのは、杜甫の勝手だし、今日から見ると、賈誼や王粲より有名な杜甫が、そう喩えるのに違和感はない。だが当時の人の目にはどう見えたか。杜甫は、詩の技倆が高かった点は世間から一目おかれていたであろうが、李白のように有名な詩人では、まだなかった。そんな杜甫が、歴史上の著名な賈誼と王粲に、自らをなぞらえているのである。おそらく自負心だけ強い、身のほど知らずの厚かましい老人と見えたのではないか。そう、杜甫には少しばかり図々しいところがあるのである。

この詩を作ったきっかけは、三、四句めにあるように、小役人からまでも、あなどられたことであろう。小役人は外見でしか人を判断しない。杜甫の学問や文学の深さはわからないのだから仕方のないことだと言える。それはもちろんひどく腹の立つことであったろう。しかしそんなことは、自分を笑い飛ばして何とか解消できる。杜甫が他の詩人と違うのはここからだ。問題なのは、大悪党どもが悪逆無道な振る舞いをして、世の人々を塗炭の苦しみにおとしいれていること。杜甫はそう述べて、世俗の人情の薄さから出発して、社会の無法さ、野蛮さに目を向けている。自分の小さな不幸に留まらずに、さらに世界のもっと大きな不幸へと思いをめぐらす、杜甫の思考のパターンが、ここにもよくあらわれている。

これと反対のベクトルが白居易である。自分の不幸にぶつかり悲しむが、世の大きな不幸をかえりみて、自分はよりましな不幸だったと気を取り直す。これも自分を安堵させる有効な方法で、これが我々普通の人間のやり方であろう。白居易の特徴は、そういう誰にも共感できる方策を提示していることである。だとすれば、我々凡人には真似のできない、気高い精神を示してくれているのが杜甫だということになる。

とはいえこの詩を書いて、杜甫の腹立ちは消え去っただろうか。杜甫だって生身の人間だ。平静になれたなら、こんな詩を書くはずがない。いまだ腹の虫がおさまらない杜甫、小さな屈辱感を止揚して、もっと大きな不幸へと思いを及ぼす杜甫、その両方ともが、詩人杜甫の真実ではなかろうか。

七　わが歌の才　尽きること　あるまじ

公安でも生計の目途が立たず、大暦三年（七六八）の年の瀬も押しつまるころ、杜甫は朝はやく公安を旅立った。向かうところはさらに南の岳陽。公安へ来たとき同様、はっきりした目当てがあったわけではない。そのことを「暁のころおい　公安のまちを　たび発つ」［2220_暁發公安］の詩に、

舟楫は　眇然と　はるかとおく　此れ自り去り
江と湖　遠く適くに　この前　期む　ところ無し

と詠っている。

岳陽に留まっていた期間はわずかで、昼間の社交活動を終えたあと、夜は船にもどっていたように見える。上陸して宿舎に滞在したとしても、それは例外的だったのではないか。岳陽での年越しや正月も、あるいは船の中で過ごしたのかもしれない。それはともかく次の詩は、はじめて岳陽に到着

［2226_泊岳陽城下］

舟楫眇然自此去、
江湖遠適無前期。

した、その日の夜を詠じている。

泊岳陽城下　　岳陽城下に泊す
江國踰千里、　江国　千里を踰え
山城近百層。　山城　百層に近し
岸風翻夕浪、　岸風　夕浪を翻し
舟雪灑寒燈。　舟雪　寒灯に灑ぐ
留滞才難盡、　留滞するも　才は尽き難く
艱危氣益增。　艱危に　気は　益増す
圖南未可料、　図南　未だ料るべからず
變化有鯤鵬。　変化　鯤鵬　有るらん

岳陽にいたり　城にめぐらす　いしがきの下　ふな泊す
江と　みずうみひろがる　この国に　はろばろ千里のみちのり　踰えきたり
いたれば　そびゆる　山城の　そのたかきこと　百層に　近からん
岸べには　つめたき風のふきつけて　夕やみに　しきりに浪を　翻し
舟には雪の　ばらばらと　寒きデッキの　灯りのうえに　ふり灑ぐ
たびに留まり　滞るも　わがうたの才　尽きてなくなる　こと　あり難く
艱しく　危うき　ときにして　気のちから　益ようちに　みなぎり増す
南せんとて　くわだて図れば　未だなお　さいさきよきこと　料るべからず
変わり化わって　鯤のうおの　鵬となる　だいぎゃくてんの　有らんかも

「長江と洞庭湖が交わるところ、岳陽の町に至り、その日、船は岳陽城の城壁のもとに停泊した」

縦横に河川や湖の広がるこの領域に、長安から見れば、はるばる千里の道のりをやって来た。岳陽は、洞庭湖の天岳山にそった名城であり、その高大さときたら、百階建ての建物にも迫るほどだ。

日暮れ時、船の停泊する岸べには、冷たい風が吹き付け、水面は荒く波立っている。吹きさらしの甲板には灯りがともされ、その寒げなる灯火に、しきりに雪が降り注いでいる。

その昔、南朝梁の詩人の江淹は、晩年に夢で彩色の筆を取り上げられ、それ以来、詩才が尽きたという。今、わたしは見知らぬ土地で、旅に行き悩んではいるが、そんなことはよもやわたしには起こりにくいはず。この人生の危うく困難な状況にあって、わたしの胸のなかには、いよいよ気力が増してくるのだ。

ここから南へ旅してひと旗あげようと思うのだが、どんないいことがこの先待ち受けているのか、想像することもできない。鯤という大魚が大鵬に変化して南に旅立った、という荘子の話ではないが、わたしのこれからの旅先にも、そんなとてつもない大変化、大逆転があるかもしれないのだ。

＊　＊

岳陽城は、南に天岳山をひかえ、洞庭湖を眼下に臨み、若い時から杜甫は、その名声を耳にしてきた。思えば、はるばる千里の道のりを越え、とうとうここまでやってきた。狭隘な三峡の町々で、三年近くも過ごした後、いまついに洞庭湖に到ったのだ。湖が広がり、大河がよこたわる「江国」のパノラマが展開するなか、峨々たる岳陽城がそびえている。その感激はいかほどのものだったか。はじめて目の当たりにした岳陽城は、実物よりいっそう大きく見えたに違いない。冒頭の雄壮な対句「江国」と「山城」、「千里」と「百層」が、文字面だけで形を整えたという、虚飾を感じさせないのはそのためである。作者の人生に裏打ちされた実感がこもっているのである。

三、四句め、湖からは西北の寒風が吹き付け、ちゃぷちゃぷと絶え間なく浪をひるがえしている。船の上の灯りには、雪がしきりに降り注いでいる。なんとも寒げな年の暮れ、侘びしい光景である。この冬景色ははなはだ凄惨でありながら、なおかつ美しい。インパクトの強い描写である。これは、この時の杜甫の心象風景でもあったに違いない。夔州の狭い町を出たあとは、江陵で新婚の弟夫婦と一家団欒の生活を夢見ていたが、それも破れて公安へ行き、ここでも思いを果たせず、今岳陽に到着している。手持ちの金もいよいよ底をついてきた。そうした状況に、風の吹き、雪の舞う、寒さ厳しき冬の夜の、この三、四句めの描写が重なってくる。

だが、詩は後半、五、六句めの転の聯から、思いがけない方向に大転換を遂げる。詩は非常にハイテンションになっていく。このままでは気力も尽き、詩才も枯れてしまうのではないか、そういう恐れがなかったはずはない。晩年に才が尽きたと評されるかの江淹（こうえん）の例もある。そのせいもあろう。その不安をはねのけるかのように、気はますます充実し、詩才が尽きるなんてあり得ないという、突拍子もない言葉が飛び出してくる。南に行って、もうひと旗あげるつもりになっている。これだけ打ちのめされているのに、この先どんな大逆転の人生があるやもしれぬ、と本気で杜甫は信じているのだ。

こうした気分の高揚には、何か理由があるのだろうか。おそらく背景には、杜甫の生来的、性格的なものがあるのだろう。杜甫は感情の落差がはげしく、落ち込むときはどん底まで落ち込み、舞い上がるときは天まで舞い上がる。杜甫に躁鬱の気があるのは否定できない。この気分の変化が、ある日ある時、一瞬にして起こる。ひとたび何かに触発されるや、たちまちにして想像がふくらみ、眼前にはとてつもない別世界が幻想されてくる。想像力の暴走と呼んでもいい。失意のなかにあった杜甫は、このとき新しい土地にやってきて、何か予期せぬことへの期待感が、突如として高まったので

ある。

岳陽、洞庭湖といえば、杜甫が敬愛してやまない大先輩、孟浩然の名作もよく知られている。

八月湖水平、　八月　湖水　平らかにして
涵虚混太清。　虚を涵して　太清に混ず
氣蒸雲夢澤、　気は蒸す　雲夢沢
波撼岳陽城。　波は撼がす　岳陽城

「洞庭湖を望み張丞相に贈る」

詩才が枯渇するのではないかと不安を抱いたのも、こういう先人の名作を前にしての、たじろぎだったのかもしれない。しかし、自分の才が尽きるなんて、有りうべからざること、と強気で述べたことは、そのまま真実となった。なぜなら杜甫はこの地で、あまりにも有名な［2228_岳陽楼に登る］の詩（左に掲げる詩を見よ）を残したからである。

一方、大逆転はあったのかというと、それも確かにあったと言える。だがそれは死後二、三百年を経た後だった。後ろ盾を求めて各地を転々とし、時には下役人にも軽んじられ、貧と病と老にあえいでいた最も有名な、古今最大の詩人となったのだから。

参考

登岳陽楼　　岳陽の　楼に登る

昔聞洞庭水、　昔より　いくたび聞きしか　洞庭の水
今上岳陽楼。　今　はじめて上る　岳陽楼
吳楚東南坼、　吳と楚のくには　東と南に　坼けひらき
乾坤日夜浮。　乾坤は　日夜わかたず　うえに浮かびて　ゆれうごく
親朋無一字、　親しきものや　朋からは　一字のたよりも　あること無く
老病有孤舟。　老いて病める　このみには　ただ孤つの舟を　有ますのみ
戎馬關山北、　戎と馬　いくさは　ふるさと関山の　北にいまも　なおやまず
憑軒涕泗流。　軒に憑りて　これをおもえば　涕泗しとどに　流れおつ

八　いまだ　知音に　あうことなし　［2230_南征］

岳陽では、大晦日と元旦の短い期間を過ごしただけで、さらに南の長沙に向かった。岳陽で作った詩は少なく、杜甫の詩集に岳陽詩は六首しか残されていない。岳陽滞在は、この南下の船旅では、最もみじめな滞在地の一つだったろう。しかし、そんななかで出来上がった［2228_岳陽楼に登る］

の詩が、実は杜甫を代表する、いな、唐詩を代表するほどの名篇になっていた。

さて、杜甫が岳陽を去って洞庭湖に入ったのは大暦四年の正月、五十八歳。そこから湘江ぞいに南下して、長沙、さらには衡陽方面に至り、また引き返して、洞庭湖へと北上し、岳陽～長沙間のどこかで亡くなるのが、大暦五年の冬、五十九歳である。この大暦四年、五年の二年間に、洞庭湖～湘江水系を船で上り、また下りながら作った詩が百首前後残っている。これらは、本稿が底本とする清の仇兆鰲の『杜詩詳注』では、巻22の後半から巻23に収められている。みな湖南省の、主として湘江水系で作られた詩なので、「湘江詩」と呼ばれている。

杜甫が岳陽を去ってから、洞庭湖～湘江間で亡くなるまでのこの「湘江詩」は、年代順にきちんと配列することがむずかしい。理由はいろいろ考えられるが、唐代、この地方は都から遠く、文化の遅れた地とみなされ、左遷の対象となるほどだったため、杜甫の詩に出てくる小さな地名が、文献に残っていないことも、その一つである。また杜甫が湘江～洞庭湖間を、上ったり下ったりしていることによる紛らわしさもある。

ここで取り上げる［2230_南征］の詩も、作られた場所が、岳陽から長沙へ南下する途中なのか、長沙からさらに南の衡陽へ向かう途中なのかで、意見が分かれている。言い換えれば正月の岳陽出発の後か、二月の長沙出発の後かの違いである。私は二月の長沙出発の後と考えているのだが、その決め手は、詩の一句めにある「桃花水」という言葉である。杜甫の乗った船は「桃花水」でみなぎった湘江の上を帆走している。杜甫が岳陽を去ったのは正月で、ゆっくり船旅を続けながら長沙に着いたのは二月下旬清明節のころである。杜甫は長沙に着いてすぐさま、衡陽に向けて出発した。この年の清明節は二月二十二日、西暦では四月七日である。この「桃花水」とは、清明節のあと桃の花が咲くころの、仲春の季節の定期的な川の増水のことを指す。だからこの詩は清明節よりあと、つまり長沙を出発した後の詩ということになる。

仇兆鰲は、長沙出発より後の作だと考えつつも、この桃花水が発生する時期が、清明節より後であることに頓着していない。そのこともあってか、詩の配列では、［2228_岳陽楼に登る］［2229_裴使君に陪して岳陽楼に登る］の後に置かれており、あたかも岳陽を出発したすぐ後のように読み取れる。［2229_裴使君に陪して岳陽楼に登る］詩の最後に「此れ従り更に南に征かん（従此更南征）」とあるので、その後にこの［2230_南征］詩を置いたのだと、仇氏は述べている。しかし「南征」の語は、長沙以南の［2249_白馬潭を発す］にも見える。そこで私は仇氏の配列の仕方を少し修正して、十首ほど後ろに動かし、［2248_潭州（長沙）を発す］［2249_白馬潭を発す］の後、そして［2250_野望］の前に、置くのがいいと思う。

南征

春岸桃花水、
雲帆楓樹林。
偸生長避地、
適遠更霑襟。
老病南征日、

南征

春岸　桃花の水
雲帆　楓樹の林
偸生　長に地を避け
適遠　更に襟を霑す
老病　南征の日

君恩北望心。　君恩　北望の心
百年歌自苦、　百年　歌うて自ら苦しみ
未見有知音。　未だ　知音　有るを見ず

南へ　たび征く
春めく岸べ　桃の花　ひらくころおい　水はみなぎり
しろき雲　うかぶがごとき帆かけぶね　あたりには楓の樹ぎの　みどりの林
生くること　偸にして　長に　あやうき地　避けきたり
いままた　遠くに　適かんとし　おつるなみだの　更に　わが襟を霑す
老いぼれて　病むことおおく　南へおち征く　きょうの　この日
君の　恩　みにしみ　はるか北　みやこ望む　わが心
じんせい百年　ひとえに歌つくり　自らを　苦しめきたる
わが音　むねのうち　みとめ知るひと　未だ有るを　見ざるなり

「船に乗って、南へと旅してゆく」

岸辺の景色は春めきたち、桃の花が咲くこの時期、川の水は上流の、雪解け水のためにみなぎっている。私を乗せた帆かけ船が、白い雲のように風をはらんで、みどりの楓の木立を背景にすすんでいる。

わたしはこれまで、いいかげんに、その日その日を、やり過ごして生きてきて、戦乱で危うそうな場所を、いつも避けてきた。そして今また、遠い地を目指し行こうとして、涙がこぼれ落ち、わたしの衣服の襟を濡らす。

老いぼれて病気だらけのこの身で、さらに南へと旅立とうとするこの日……。いまさらながら、天子の恩をしみじみと身に感じ、都のある北の方を、はるかに眺めやるわたしの心……。

いわば百年のこの人生、歌こそわが命と、ひたすら句をひねり、自らを苦しめてきた。しかし、いまだにわたしは、本当に自分の心を理解してくれる人に出会っていないのだ。

＊　＊

冒頭で述べたとおり、この詩は、春のまっただなか、長沙を去った後の作である。左にかかげる詩［2248_潭州（長沙）を発す］は、ちょうど長沙

を出発した朝の状況を次のように詠う。

夜醉長沙酒、　きのうの夜は　長沙でのみし　酒に酔いしれ
曉行湘水春。　ひとよあけての　曉に　湘水の　春げしき　ふねにて行く
岸花飛送客、　岸べに　ほころぶ　花ばなは　ちって飛んで　客の　われをみ送り
檣燕語留人。　檣に　とびかう　燕は　人に留まれと　語ぐるがごとし

杜甫を送別してくれるのは、岸辺の散る花と燕しかいない。そんなさびしいなかで、長沙を出立していることが描かれている。燕も飛んでいるので、季節は正月よりもっと遅いであろう。岸辺に飛び散る花は、桃の花かもしれない。

また［2249_白馬潭を発す］の詩は、白馬潭がどこにあるか、意見が分かれているが、私は仇氏の説によって長沙近辺と考える。

水生春纜没、　水　あらたに生じて　たびゆく春の　ふねの纜　みずに没み
日出野船開。　日の　出ずるとき　野たる　わが船は　ここに開きて　ふなでをす

いずれにしろ、朝の船出のとき、春の出水で川の水かさが増していることが分かる。さらに、

莫道新知要、　新しき知りあいを　ここに要めんなどとは　道う莫かれ
南征且未迴。　いまより　われ　南に征きて　且くは　未だ　迴らざるなり

とあり、私はもうここを去るのだから、新しい知り合いなど要らないと、強がりを言っている。この詩には、春の川の増水や「南征」「新知」など、［2230_南征］と関連する内容が多い。

この時期、杜甫は、都よりますます遠く離れていくことによって、いよいよ自分が朝廷に無意味な存在になってゆく寂しさにとらわれている。［2250_野望］には、それでもなお残る朝廷への未練を、

扁舟空老去、　われは　扁き舟にのり　このまま空しく　老い去りゆき
無補聖明朝。　聖の　明き　朝には　われの補う　ところ無し

のように吐露している。それも［2230_南征］の六句めに「君の恩をおもうて　北のかた　望みやる　わが心」と詠じているのと共通する。しばらく見えなかった天子への思いが、この［2230_南征］で、突然現れる唐突さも、こういう流れにおくと無理なく理解することができる。

以上のように、詩の内容や言葉づかいでも、［2230_南征］詩は、この三首に似るところがあり、この前後に置くのがよりふさわしいと思う。

二句め、船が航行する風景のなかの「楓樹の林」であるが、「楓」は四川省や長江以南に多い、マンサク科のフウの木であり、日本にその野生種は無いとされる。日本にフウが渡来したのは江戸時代で、日本にたくさんの種類が自生するカエデ（カエデ科）とは、違う木である。しかし昔の日本人も間違えたように、フウとカエデはよく似るので、景観としては日本のカエデ（モミジ）の林を想像しても大差は無いであろう。風景のなかにフウが描かれはじめるのは、杜甫が成都入りしてからで、フウはその後の杜甫の詩を特徴付ける植物の一つである。

三句めの「偸生」、「避地」の言葉は、いずれも他の詩人はあまり使わない。しかし杜甫は何度か使っており、これもまた、杜甫の詩を特徴づける言

葉といってよい。杜甫が理想とするのは、天子を助けてよき政治を実現する生きかたである。しかし現実の杜甫は、官僚になかなかなれなかったし、なっても下級官僚か、すぐさま天子にうとまれ左遷された。本来のあるべき人生とはなっていない、そのような自分の現実を、「生きることを偸（かりそめ）にする」、その日その日をいいかげんに生きながらえる、と杜甫は考えてきた。華州の官を辞めてからは、安史の乱後のきな臭い状況から逃げ、秦州、成都、長沙というぐあいに、戦乱を避けながら生きてきたともいえる。杜甫の人生はまさに、この三句めに言うように、生（せい）をかりそめにし、地を避けてきた一生であった。

七句め「人生百年、これまで自分は、ひたすらよき句を求めて苦吟してきた」という言い方は、杜甫の八年前の発言を思い出す。そのとき杜甫は成都草堂の二年目で、生活は貧しくとも平和なうちに暮らしていた。「わが人と為（な）り　性は僻（かたよ）ってまともならずして　佳（うま）き句に耽（ふけ）り、つくるうたは　語の人を驚かさずんば　死しても休（や）まず。（為人性僻耽佳句、語不驚人死不休。）」［1014_江上値水如海勢聊短述］と述べていた。句の表現に命をかけるという、すさまじいまでのこの姿勢は、死ぬまで変わらなかった。

この詩で一番ハッとさせられるのは、詩の最後で、杜甫が自分にはまだ知音がいない、ともらしているところではなかろうか。杜甫ほどの大詩人なら、当然当時から有名なはずで、自分を理解してくれる者がいないなどと、なぜ嘆く必要があるのか、という疑問がまず起ころう。しかし実際は、生前から国民的な人気があった李白や白居易のような、有名詩人とは違っていた。杜甫の詩は深刻な内容、真に迫る描写、雄渾な格式、高い技倆等々、何か特別な詩であることは分かっていても、同時代から真の価値が理解され、共感され支持されることはほとんどなかった。あれほど偉大な詩人にして、この発言かという最初の驚きは、すぐさま古今東西の偉大な芸術家は、往々にしてこういうものだったと納得させられるのである。

ただし「知音」にも意味の広がりがある。友人、支援者という広い意味で使われることもあり、杜甫も晩年の絶筆と言われる詩の中で、湖南の経済的支援者たちを知音と呼んでいる（「感激するは知音に在（あ）り」［2348_風疾舟中伏枕書懐三十六韻奉呈湖南親友］）。

しかしここは七句めにいう「歌」との関わりから、狭い意味での知音、杜甫文学の真の理解者、と考えていいだろう。そうした場合、知音はやや重い意味を持つことになる。そういえば知音とは、元来からして得がたいもの、稀なるものである。知音がそんなに多いはずがない。だから知音という言葉が使われるときには、知音の少なさを嘆く方向で用いられるのが常である。

そういうまとめ方をしてしまえば、杜甫のこの知音も、元も子もなくなってしまう。しかしそれでもこの詩の最後に表明される知音にいまだめぐりあえずという嘆きには、重みを感じる。それは、われわれが杜甫の人生と文学の、不遇と苦難を知っているからであろう。もしもこの嘆きが、三流詩人の発言ならどうであろう。その時は単なる不満や自己弁護の開き直りに過ぎない。詩人の人生を知ることで、詩の言葉の意味が違ってくる一つの例であろう。

九　まこも御飯に　ぬなわの汁物　徳利一本　つけ添えて

［2262_江閣臥病、走筆寄呈崔盧両侍御］

大暦四年の正月早々に、岳陽を出発した杜甫は洞庭湖に入り、湘江をゆっくりさかのぼって、二月下旬の清明節のころには長沙に到着した。春の盛

りであったが、そのころの杜甫の身体は最悪の状態であった。片方の耳は聞こえず、右腕がきかず、床に臥せって空に左手で字を書く、と詠じている（…右臂偏枯半耳聾。…悠悠伏枕左書空。［2247_清明二首］其二）。

長沙からは、さらに衡陽に向かった。若いときからの友人であった韋之晋が、一昨年から衡陽の長官となっていたのを、頼ろうとしたのである。ところが衡陽に着いてみると、韋之晋は長沙の長官になって既に赴任していた。行き違いになったのである。実は清明節のその日に、衡陽の韋之晋に対して、長沙の長官となるよう辞令が下っていた。杜甫はそれを知るよしもなかった。それどころか、頼みの韋之晋は、四月には長沙で急逝してしまう。かといって杜甫は、そのまま衡陽に居続ける意味もなく、衡陽から長沙に引き返すことにした。

夏には長沙に戻ってきたが、長沙には翌年の春まで、一年近くも滞在することになった。長沙では船上でも過ごしたが、一時期、上陸して川に面した江閣にも住んだ。次の詩は長沙到着後まもないころ、江閣で病の床に臥せって、手元不如意を嘆いていたときの詩である。

江閣臥病、走筆寄呈崔盧兩侍御

客子庖廚薄、
江楼枕席清。
衰年病秖瘦、
長夏想為情。
滑憶彫胡飯、
香聞錦帶羹。
溜匙兼煖腹、
誰欲致杯罌。

江閣　病に臥し、筆を走らせ、崔盧両侍御に寄せ呈す

客子　庖廚　薄く
江楼　枕席　清し
衰年　病みて秖だ瘦せ
長夏　情を為すを想う
滑には憶う　彫胡の飯
香には聞く　錦帯の羹
溜匙に　煖腹を兼ね
誰か　杯罌を致さんと欲する

江べの　閣に　かりずまいして　病に臥せ、いそぎ筆を走らせ、崔と盧　両りの侍御どのに、このうたを　寄り呈ぐ

みしらぬとち　客子には　庖廚のごちそう　すくなく薄く
江べの　楼　やまいにふし　枕と　席　ねどこのあたりは　わびしく清し
衰えし　わが年　病みては　秖だひたすらに　痩せゆきて
ひあし長き夏のつき　われへの情け　たれか　為さんものかと　想いをめぐらす

滑らかなるもの　彫胡をかしぐ　まぜ飯に　憶いをはせ
香しきもの　錦の帯の　ぬなわの羹　聞きおよぶ
匙より溜る　まこものめしに　腹　煖むる　あつもの兼ねそえ
誰か　杯と　甍　われに致けんと欲るもの　あらんかな

「湘江ぞいの楼閣に、わたしは病のため長らく臥せっており、検察官であられる崔氏、盧氏の御両人に、急ぎ一筆したためて、この歌を送り届けご覧に供します。」

旅にある身であるため、わたしはおいしいご馳走も口にすることが多くありません。しかも病に臥せって手元不如意で、身辺は清貧といえば聞こえはいいのですが、その実、まことにわびしいものです。

老衰したこの年齢では、さらに病気が重なれば、ますます痩せていくだけです。日足の長い夏の季節となり、ひさしく床に臥せっていると、こんなわたしを憐れんで、同情心を起こしてくれる人はいないものかと、思いをめぐらします。

なめらかなものでは、マコモのご飯に思いを馳せますし、香り高いものでは、錦のように美しく、帯のように細長い蓴菜の汁物が、おいしいと聞き及んでいます。

匙ですくって食べようとするかたわら、匙からすべり落ちるのがマコモの御飯で、おなかを温めてくれるのが蓴菜の熱い汁物です。その二つを一緒にして、さらに酒杯と酒甕とを加えて、誰かわたしに、届けようとしてくれないものでしょうか。

＊　＊

酒と食べ物を友人に所望した戯れの詩である。このようなおねだりの詩なら、「戯れに呈す」のような詩題になっていてもよさそうだが、ここはそうではない。「戯れ」にならないほど真剣に切迫している、というわけでもないのだろうが、実際の所はよくわからない。

杜甫はいま湖南省の客舎で寝込み、病の床から急ぎ筆を走らせ、詩を書き送っている。もちろん詩はとっくにできあがり、添削も終わっていよう。すでに二人に送り届けられ、二人は読んでいるかもしれない。いな結局は送り届けられなかったかもしれない。しかし、そんなことはこの詩を読むのには関係ない。いま杜甫が病床で、食べ物や酒を想像している、そんなシーンを思い浮かべよう。詠じられた状況が、いま同時進行しているものとして、詩は作られ、そういうものとして詩は読まれる。それが作者と読者の暗黙のルールというものだろう。

詩の冒頭から、庖厨、つまり台所などという生活臭のある言葉がでてくる。決して風雅な詩ではない。しかも他の詩人と違って、杜甫の使う庖厨は、単なる場所や空間としての概念的な用い方ではなく、料理、食事のイメージと直結し、「庖厨が薄い」つまり料理が貧しい、少ないなどと不満を言って、いささか所帯じみている。

二句めの「枕席清し」が、それとは対照的で、思わずニヤリとしてしまう。病床の回りが清いとは、清貧な、つまり清く正しく貧しいという、杜甫

の生活を連想させ、なんとか救援してあげねばという同情心を呼び起こす。この冒頭の聯の対句だけで、生きかた正しく、旅の身にある困窮せる一老詩人、その彼が今しも病に倒れ、食い物にも難儀している、という強いメッセージを発している。生活感はあるが卑俗さは無い、風流ではないが上手に作られている。そんな書き出しで、もうこれだけで、作者が詩で訴えんとするところの、半分以上は言い得ている。

杜甫が滞留するこの地方は、マコモやジュンサイがよく取れ、夏はジュンサイの食べ頃であり、夏から秋にはマコモが実を結ぶ。病床から杜甫が空想しているのは、そのようなマコモご飯とジュンサイ汁で、決して贅沢な肉料理などではない。謂わば軽いランチ風のジュンサイスープ付きマコモライスで、なんとも質素な食事ではある。そこがいじらしいと言えばいじらしい。詩でもって酒をねだるだけなら、風流の詩に属するであろう。だがここは、食事をおねだりしている。しかも謂わば定食風で、日常を生きていくための常食である。これでは生活臭が少し出過ぎではないか。

しかしマコモ飯とジュンサイ汁は、詩語として使われる時は、若干の風流さと隠遁的な雰囲気を醸しだす。マコモは、水辺に群生しているイネ科の大型植物である。茎に菌類がついて肥大したものはマコモタケと称して食用に供されるが、ここでは開花し結実した小さな穀粒を、煮て匙ですくって食べる。菰米（こべい）や彫胡（米）などと呼ばれ、唐詩では質素な隠遁ぐらしの食卓に登場することが多い。

ジュンサイは、スイレン科の水草で、食用にするのは、粘質物におおわれた巻いた若葉である。中国ではもっぱら熱い吸い物（羹（あつもの））にし、「蓴羹（こう）」という言葉もあるくらいである。ジュンサイと言えば、晋の張翰（ちょうかん）の故事が有名で、彼は呉から都の洛陽にのぼり官に就いていたが、ある日秋風が吹くや、故郷のジュンサイ汁やスズキ（鱸）のなます（鱠）等の郷土料理を懐かしがり、ついに官を辞めて故郷に帰ってしまった。それ以来ジュンサイには、官を棄て故郷に隠遁するというイメージができあがった。

だから杜甫がここでジュンサイ汁とマコモ飯を挙げているのは、きわめて自然であるように思えてくる。杜甫はいま、望郷の念にかられながら、南の長沙で病の床に臥せ、生活は困窮している。そういう状態にある杜甫に、この二つの食べ物の雰囲気はうまく合う。むしろここで、普通はジュンサイと対で挙げられる「鱸鱠（ろかい）」の方を持ち出してくれば、魚肉の贅沢さがわざわいして、雰囲気が合わなくなるのではないか。また他の多くの詩人がそうであるように、「蓴羹」と「鱸鱠」を対にして詩を作れば、杜甫はその時、安易に故事を詩の中に持ち込んできただけとなり、生活の実態に合わせて、適確な詩語を選んで詩を作ったのではないということになろう。当然そうであれば、詩は陳腐で嘘めいたものになってしまう。

この詩がうまく作られていると感心するのは、対句の題材として、ジュンサイとマコモが取り上げられている適切さというよりは、むしろそれが、どのような言葉で仕立て上げられているかである。

彫胡飯の対句が、錦帯羹として作ってある。飯と羹が同じ食べ物で、対であることは一目瞭然だが、彫胡と錦帯の対がわかりにくい。「蓴菜羹」という言葉もあるので、それを使えば何も問題ないが、杜甫が追求する対句は「工対（こうつい）」と呼ばれ、語の分類範疇まで対にするので、もう少し厳密である。彫胡と蓴菜の対では、漢字の一字一字、つまり彫と蓴、胡と菜が対になっていない。そこで蓴菜を錦帯と言い表す特殊な呼び方がきっとあって（たとえばそれはこの地方の方言かもしれない）、杜甫はそれを用いたのではないかと思われる。彫胡と錦帯の対句構造は、次のように考えることができる。胡はあごひげで、同じ身体の外側にある帯と、対と見なすことができる。錦は模様のついた綾織りで、美しいの意味。彫は模様をほって飾るの意味で、錦と意味上の関連があり、対と見なせる。漢字は多義性なので、彫胡と錦帯が対句でないという批判には、このように裏の語義と表の語義を

使い分けて答えることができるのである。この詩で杜甫はこの対句作りに苦労し、それは必ずしも大成功だったとは言えないが、それでも彫胡飯の対に錦帯羹を持ってきた方が、蓴菜羹を持ってくるより、ずっといい対句になったのではなかろうか。

マコモ飯には、滑らかな点をあげ、ジュンサイ汁には香りの面をあげながら、それぞれに対して、それを「憶う」「聞く」という動詞を使っている。例えば「欲す」や「求む」を用い、「滑欲～、香求～」としても、律詩として成り立つ。しかしここでは、そういう直接的な欲求を示す動詞を敢えて使っていない。それによって、マコモやジュンサイに対する一種の憧憬が生じて、詩に雅な雰囲気をかもしだしている。

「滑らか」の五句めを、七句めの「匙より溜る」で受け、「香り」の六句めを、「腹を煖む」で受け、五、六の二つの句を、七句めの一句で受けとめている。そして八句めにまったく新しい酒の話題を出している。この句作りは、記号化すれば、a＋b、c（ab）＋d、となる。さらに「c（ab）＋d」は、「旧＋新」とも書き換えることができ、論理的に美しい構造となっている。

実は対句をたっとぶ中国的思考は、論理を対句的に整然と組み立てることが好きである。さらに言えば、万物を分類し、体系化することにすぐれる。しかしその長所は、単純な形式論理に堕しやすいという短所を合わせ持ち、強引さの裏からこぼれ落ちる面も少なくない。日本的思考が、個別にこだわり、個別に惚れ込み、木だけを見つめつづけて、いつの間にか森を見ることを忘れてしまいがちであるのと対照的である。論理的思考の面では、むしろ中国は西欧に近いといえる。その根本的原因が何であるかは言い難いが、中国の対句的思考と律詩は非常に相性がいいということは言える。

最後に、杜甫はジュンサイ汁とマコモ飯と酒をもらったとして、どれがいちばん嬉しかっただろうか。おそらくは酒だったろう。杜甫は最後は酒の病で身をくずすことになる。

十　一寸の荒れ地も　ことごとく　牛のたがやす　［2318_蠶穀行］

大暦四年（七六九）は、十年近くも続いた安史の乱が終結して五年めである。とはいえ乱以後、唐の国威は地に落ち、地方軍閥が割拠し、小さな反乱が各地で勃発し、さらに周辺の異民族の脅威にもさらされた。杜甫自身、その戦乱の真っ直中にあり、時代の波に翻弄された一生であったと言える。

十年前、一時はそこに隠遁しようかとさえ考えた秦州は、今は吐蕃に占領されている。七年前（七六二）の成都では、徐知道の乱が起こったため、旅に出ていた杜甫は、しばらく家族の居る浣花草堂に帰ることができなかった。四年前（七六五）に杜甫が成都を去ったその七、八ヶ月後には、新任の節度使が崔旰（さいかん）に殺され、成都は大いに乱れた。昨年（七六八）の五月には楊子琳が成都に攻め込み、七月には楊子琳は敗走した。今年の二月、楊子琳は今度は夔州を攻めた。秦州でも、成都でも、夔州でも、すんでの所で、大きな戦乱に巻き込まれずにすんだ。もう少し長く滞在していたら、いまごろ杜甫は家族とともに長沙にいることはできなかったであろう。

長沙には一年近くも滞在することになり、晩年最後の落ち着いた短い期間であった。それでも翌大暦五年（七七〇）の四月に、この長沙で臧玠（ぞうかい）の乱

が勃発し、杜甫は戦火の中を命からがら脱出し、家族とともに衡陽へ避難していった。

次の詩は、大暦四年の長沙での作と考えられている。

蠶穀行

天下郡國向萬城、
無有一城無甲兵。
焉得鑄甲作農器、
一寸荒田牛得耕。
牛　盡　耕　、
蠶　亦　成　。
不勞烈士淚滂沱、
男穀女絲行復歌。

蚕穀行

天下の郡国　万城に向んとするも
一城として　有ること無し　甲兵の　無きものの
焉くんぞ得ん　甲を鋳て　農器を作り
一寸の荒田も　牛の耕やすことを　得んことを
牛は　尽く耕し
蚕も　亦た成る
労せず　烈士の　涙　滂沱たるを
男穀　女糸　行き復た歌う

蚕と　穀もつの行

天が下　郡や国のおおきこと　万にものぼる　城に向んとするも
一つ城とて　甲や兵の　いくさ無きもの　有ることは無し
焉くんぞ得ん　とかしたる　甲を　かたに鋳こんで　農の器ぐと　作し
一寸の　ちいさき　荒れたる田ぱたも　牛の耕やすことを　得んことを
牛は　尽く　たはたを　耕し
蚕も　亦た　しろき　まゆと成る
ぎに　烈き士の　涙　滂沱と　あめのごとく　ながるるを　労わすことなく
男　はそとに穀つくり　女はうちに糸をくり　行きつ復た　歌　うたわん

「蚕と穀物の歌」

この大唐の御代に、天下の大小の都市や町は、万の数にも上らんほどの多さである。そうだというのに、戦争の無いものは、一つとして無いありさ

までである。

なんとかして、溶かした武器や甲冑を鋳込んで、くわやすきの農具を作り、一寸四方の、どんなに小さな、荒れ果てた田畑さえ、牛が耕すことができるようになったらいいのにと思う。

そのときには、牛があらゆる田畑を、余すところなく耕すこととなり、蚕も桑の葉を食べて大きくなって、繭となる。

そうなれば、義にきびしく生きる人士に、いきどおりと悲しみの涙を、とめどもなく流させる、そんなことを、もうさせなくてすむのだ。そして百姓男たちは、野良で穀物を作り、女たちは家内で糸を繰り、はたらきつ、歌うたいつ、平穏に生きることができるのだ。

＊　＊

七言古詩である。詩題の「行」は歌謡の意味で、律詩のように規則が厳密な詩ではない。だから詩の途中で韻を換えている。前半は偶数句めの句末が「兵、耕、成」と韻を踏む。七言だから冒頭の句末の「城」も韻を踏んでいる。後半の句末は韻を換えて「沱、歌」と韻を踏む。五句めと六句めの文字数が、それぞれ四文字分足りない。二つを一句にまとめて六文字の句とし、詩全体を七行詩と考えるのが普通であろう。しかし私は、それぞれ四文字足りない部分は、音が延長されていると見なし、一句として独立させ、全体を八行詩で考えている。五句めと六句めは、ゆっくり音を引き延ばして歌い、牛が田という田を耕しつくし、到るところで蚕が成長している、そんな理想的で豊かな農村を頭に思い浮かべながら、詩を歌うのだと考えたい。

この詩は、まず最初の詩題から人目を引く。「蚕穀」という語彙は、当時としては非常に見慣れない言葉である。唐以前の正統的な詩文や、思想、歴史の文献などには用例をさがしだすのは容易でない。唐代でも、三例ほどしか見出しえず、唐以後も非常に少ない。しかし、今日から考えると「蚕穀」とは、蚕つまり絹と穀物を意味し、とても分かりやすい言葉である。絹と穀物は、均田制で農民が国家に上納しなければならない「租庸調」の二大税である。「庸」は年に二十日分の力役だが、代用の絹でもって、「調」と一括して上納されていた。「蚕穀」は、唐代の均田制以後にできあがった、当時の口語であったのかもしれない。農民たちの両肩に重くのしかかってくる言葉であるが、知識人の生活にはあまり関わってこない語彙であったろう。杜甫は、伝統的な詩の雰囲気にそぐわないこのような語彙を、詩のなかに持ち込んでいることになる。「蚕と穀物の歌」、詩の題からして、実は杜甫しか作り得なかった詩の題ということになろう。

冒頭の書き出しが力強い。一句めと二句めを続けて、一気に読みくだすようになっている。「世の中には、大小とりまぜ、万の数にも上る都市や町があるというのに、軍隊で武装しないものは、一つとして無いのだ！」これはもう、いつまでも続く戦乱の世に対する怒りというか、嘆きというか、どうにかしたくても、どうすることもできない悲痛な思いが、抑えきれずにほとばしり出て、一気呵成にできあがった、という叫びの句である。そのようにひと息にできあがったものなので、この句には、一文字とて添削を加える余地はない。と、古人も思ったに違いない。

三句めの「焉くんぞ得ん」は反語ではなく、「安得」と同じで、ぜひとも何々したいものだ、という強い願望を示す。杜甫はこの意味での「安得」「焉得」をしばしば用いる。杜甫の理想主義をよく体現する言葉といえよう。「武器を溶かして農具を作り、どんな小さな荒れ地も、余すところなく牛が耕すようになったらいい。」なんと素晴らしい言葉だろう。こういう理想的な美しい言葉を、何の屈託もなく、真正面から堂々と言ってのける人と

いうのは、そう多くはない。

杜甫がこのような言葉を吐き出すことができるのは、杜甫の詩の作り方がうまいからではなく、杜甫の心が素晴らしいからである。大きな美しい心がないと、どんなに手練手管の術に長けていても、こうした詩句は書けない。偉大な心がなければ、一流の詩人にはなれない。杜甫が一流の詩人であるというのは、まず大前提として杜甫がより大きな心、より熱い心、より美しい心をもつ人だからである。その大きな心のわずか何分の一かが、やっと言葉という手段によって、人にも伝わるのである。人に伝わったときには、すでに何割分かが減殺されている。人を感動させる言葉の裏には、それにもまさるもっと大きな、詩人の心があることを知っていなければならない。

さてこの三句め、武器を溶かして農具をつくるという考えは、実は中国古代の思想にすでに存在する。杜甫も何度も詩に歌ってきた。よってここでは四句めの「小さな荒れ田も見捨てられずに耕され尽くす」という言い方に注目したい。この句の眼目は「一寸」という言葉であろう。「一寸」が有るかないかでは随分と違う。杜甫は、田畑というのは、牛で耕され、種をまかれ、穀物を実らせてこそ、はじめてその使命を果たすものと考えていたであろう。その田畑は、美田であろうが荒れ田であろうが変わりはない。さらに言えば、たとえ一寸の取るに足りない荒れ田であろうと、広大な美田と同じように、牛に入ってもらい、耕してもらい、穀物を実らせる、そうやってこそ、一寸の荒田も浮かばれ、天から与えられた存在意義を全うすることができる。杜甫はそういう風に考えていたに違いない。ここには杜甫の、大小貧富、貴賤上下の差別なく、また生物無生物にかかわらず、あらゆる物をいとおしむ姿勢が、遺憾なく発揮されている。無生物まで平等視しようとする姿勢は、西欧社会の人道的博愛主義とは違い、われわれ日本人の「もの」を大切にする心に通じるものであろう。

五、六句の変則性については、最初に述べたとおりである。どんな田地も牛があまねく耕し、耕されない田畑がないような、そんな理想の農村世界を思い浮かべている。そこには蚕に食わせる桑も育っている。杜甫の脳裡には、このような情景がぐるぐる回っているのだ。句型が変則的になっている部分は、しばしば軽視されがちだが、むしろそこにこそ作者のこだわりがある。普通の句型では表現し足りないからこそ、そのような句型を取るのであり、そこにこそ作者の思いが凝縮されている。

最後の二句は、ここで韻がかわり、段落もかわる。直前の五、六句でたっぷりと理想社会を思い描いたあと、そういう社会が実現したら、悲惨な農村に涙を流す必要もなくなり、農夫も農婦も存分に仕事に精を出すことができるのに！と、願いの形で、詩は終わる。ここで杜甫が願っているのは、とてもささやかなことである。農婦が憂いなく糸をつむぎ、農夫が安心して野良を耕せるようにという、ただそれだけのことである。しかしそのためには、鍬や鋤の鉄の農具が充足し、戦争で耕牛が引っ立てられることもなく、男が兵役に駆り出されもせず、戦費調達の重税をおっかぶされることもない、そんな平和な社会になる必要がある。

それはとても実現のむずかしいことである。おそらく杜甫はそんな社会が容易に実現するなどとは思っていなかった。しかし杜甫はそれを願わざるを得ないのである。この時の杜甫はどうであったか。風貌は老衰し、礼服はすり切れ、小役人には馬鹿にされ、耳が遠くなり、腕はしびれ、目はかすみ、身体のあちこちがおかしくなっている。生計は困窮し、人の好意にすがって生きている。

そんな杜甫が、いま、自分のことを忘れ、農民を悲しみ、農村の疲弊に涙し、戦争のない平和な社会を心底から願っているのである。みすぼらしい

一老詩人のこんな願いが、何か社会の変革に役立つだろうか。おそらく何の役にも立たなかったろう。しかし、そんなみじめな自分の状況から、世のため人のためそんな大きなことを願っている、その詩人の純粋で一途な心に、我々は何よりも感動するのだろう。ここにこそ杜甫の真骨頂がある。

古川末喜（佐賀大学　文化教育学部　日本・アジア文化講座）